

北町遺跡Ⅱ

KITA MACHI SITE

—長野県立飯山北高等学校小体育館建設に伴う発掘調査報告書—

2001・3

長野県飯山市教育委員会

北町遺跡Ⅱ

KITA MACHI SITE

—長野県立飯山北高等学校小体育館建設に伴う発掘調査報告書—

2001・3

長野県飯山市教育委員会



弥生式土器（甕形土器）



古墳時代の遺物



中・近世の遺物（肥前陶磁器など）



中・近世の木製品（下駄など）

例 言

- 1 本書は、長野県飯山市大字飯山字北町、長野県立飯山北高等学校敷地内に所在する北町遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、飯山北高等学校（学校長 富井捷人）より委託を受けた飯山市（飯山市教育委員会担当）が、平成12年10月23日より11月30日まで実施した。整理作業は、飯山市埋蔵文化財センターにおいて、平成13年3月まで実施した。
- 3 調査体制は以下の通りである。

団 長	高橋 桂	（飯山市文化財保護審議会長）
調査担当者	望月静雄	（飯山市教育委員会事務局）
調 査 員	竹田保夫	（下高井郡山ノ内町）
	田村滉城	（飯山市・整理作業）
作業参加者	万場義秋・高橋喜久治・高橋武・岩井伸夫・阿部智子・宮本鈴子・藤沢和枝 小境雅彦・小林正子・石田里字子・杉村悦子・大口しづか・小林美里・丸山和 作（重機オペレーター）	
作業協力者	伊達信寿・山本伊都子（飯山市教育委員会事務局）	
整理参加者	小林正子・小林加代子・藤沢和枝	
事 務 局	清水長雄	（飯山市教育長）
	市川和夫	（飯山市教育次長）
	平野英孝	（飯山市教育委員会生涯学習課長）
	丸山一男	（飯山市教育委員会生涯学習課社会教育係長）
	伊達信寿	（飯山市教育委員会生涯学習課社会教育係主査）
	望月静雄	（飯山市教育委員会生涯学習課社会教育係主査）
- 4 本書の作成は、高橋団長の指導のもと、調査団が行った。文責は目次に記した。
- 5 発掘調査から整理作業において以下の方々よりご指導・ご協力をいただいた。記してお礼申し上げる（順不同・敬称略）。
坂井秀弥（文化庁文化財調査官）・廣瀬昭弘（県文化財・生涯学習課指導主事）・郷導哲章（飯山北高等学校教頭）・(株)写真測図研究所・(有) ミスズ堂
- 6 出土遺物・図面類は飯山市埋蔵文化財センター（飯山市大字常郷137-3 電話0269-65-3993）で保管している。

目次

口絵

第Ⅰ章 遺跡の位置と歴史的環境	高橋 桂・望月静雄	1
第1節 遺跡の位置		1
第2節 周辺遺跡		1
第Ⅱ章 経過		11
第1節 調査にいたるまでの経過	望月静雄	11
第2節 調査経過	竹田保夫・望月静雄	13
第Ⅲ章 発見された遺構と遺物	望月静雄	21
第1節 概要		21
第2節 弥生時代		23
1 遺構		23
2 遺物		24
第3節 古墳時代		25
1 遺構		25
2 遺物		29
第4節 中・近世		33
1 遺構		33
2 遺物		37
第5節 その他の遺構と遺物		41
第6節 遺構・遺物課題		45
第Ⅳ章 まとめ	高橋 桂	48

図 版 目 次

図 1	北町遺跡の位置 (1:50,000)	2
図 2	周辺遺跡分布図	3
図 3	周辺の旧石器・縄文時代遺跡	5
図 4	周辺の弥生・古墳時代遺跡	6
図 5	周辺の平安時代遺跡	7
図 6	周辺の中・近世遺跡	8
図 7	北町遺跡周辺地形図 (1:2,500)	12
図 8	長野県立飯山北高等学校校舎変遷図 (1)	18
図 9	長野県立飯山北高等学校校舎変遷図 (2)	19
図 10	調査区位置図 (1:400)	20
図 11	遺構分布図 (1:160)	22
図 12	弥生時代の竪穴住居址 (S B 2) (1:60)	23
図 13	弥生時代の遺物 (1:4,1:3)	24
図 14	古墳時代の竪穴住居址 (S B 1) (1:60)	26
図 15	1号遺物集中地点分布図 (Loc.1) (1:40)	27
図 16	古墳時代の土坑・溝 (S K・S D) (1:40)	28
図 17	古墳時代の遺物 (1) (1:3,1:2)	30
図 18	古墳時代の遺物 (2) (1:3,1:4)	31
図 19	古墳時代の遺物 (3) (1:3)	32
図 20	中・近世の遺構 (1) (1:40)	34
図 21	中・近世の遺構 (2) (1:40) (1:80)	35
図 22	中・近世の遺物 (1) (1:3)	38
図 23	中・近世の遺物 (2) (1:3,1,4)	39
図 24	中・近世の遺物 (3) (1:4)	40
図 25	ピット群分布図 (1:80)	42
図 26	江戸時代後期の飯山城下絵図 (部分)	47

表 目 次

表 1	周辺遺跡地名表	9
表 2	発見された遺構一覧	21
表 3	ピット計測一覧表	41
表 4	土器・陶磁器計測表	43

写 真 目 次

写真 1	上 調査区近景 下 調査風景	51
写真 2	上 調査区全体 (南から) 下 調査区全体 (西から)	52
写真 3	上 古墳時代1号竪穴住居址 (SB1)	53
	下 古墳時代1号遺物集中地点 (Loc.1)	53
写真 4	上 古墳時代10号土坑 (SK10) 下 古墳時代10号土坑土器出土状態	54
写真 5	上 中・近世9号土坑 (SK9) 木製品出土状態	55
	下 中・近世3号土坑 (SK3) 確認状況	55
写真 6	上 弥生式土器 甕 下 古墳時代の土器 (1)	56
写真 7	上 古墳時代の土器・陶器 (2) 下 古墳時代の土器 (3)	57
写真 8	上 中・近世の陶磁器 (1) 下 中・近世の陶磁器 (2)	58
写真 9	上 中・近世の木製品 (1) 下 中・近世の木製品 (2)	59
写真 10	内耳土器	60

第I章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の位置

遺跡は、飯山市大字飯山字北町2610番地に所在し、長野県立飯山北高等学校々地内にある。

千曲川が信濃の最後に残す平が飯山盆地であるが、千曲川によって盆地は大きく二分されており、東側は木島平と呼称されている。飯山市街地は、飯山盆地の西側に発達した町である。市街地西側は斑尾山麓となっており、上境一鬼坂断層線によって急峻な地形を呈している。断層線と千曲川という地理的制約を受けて飯山市街地は、一筋の町並となっている。

遺跡の所在する飯山北高等学校は、飯山市街地の北端に位置する。北方を斑尾山中の沼の池、湯の入沢に源を発する皿川が西から東へと流れ千曲川に注いでいる。飯山北高等学校は、この皿川によって形成された自然堤防状上の微高地に建っている。標高は315.31mである。

飯山北高等学校の北側約200mほどの所に有尾集落があり、有尾集落の南端を起点として長峰丘陵が北方へと走り、飯山盆地西側の平をさらに二分している。この丘陵に二分された西側を外様平、東側を常盤平と称し、弥生時代遺跡を中心として各時代にまたがる遺跡が濃密に分布している。

「広義の飯山盆地は、洪積台地の西側に凹地が存在するのが特色である」と弓削春穂氏は指摘し、更に「長峰の西側の外様平、片山、愛宕山西側の上倉、奈良沢の凹地、城山の西側の田町、北町の凹地がそれである」と説いている。飯山北高等学校は、この田町、北町の凹地（低湿地帯）に臨む微高地上にあり、低湿地帯とは2～3mの比高差を有している。従って地下水面は高く約1mほどで湧水を見る。ただ水質はよくない。

飯山北高等学校々地内に遺跡の存在が、確認されたのは昭和37年の校舎改築、同42年のプール建設の際に地下1mほどの所で弥生式中期土器破片が出土したことによってであった。その後、昭和58年には格技室建設に伴い発掘調査がなされた。結果、遺構は確認できなかったが、弥生時代中期の土器集中地点が検出され、付近に集落の存在を予測させた。しかし、北高校付近は地下水位が高く、低湿地に臨む端部でもあり、集落はもう少し市ノ口や神明町などに寄った高台に中心地をもつだろうと考えていた。

第2節 周辺遺跡

飯山地区を中心として北町遺跡の周辺に存在する遺跡について触れてみよう。信濃史料考古編の地名表によれば、飯山地区の遺跡として①有尾、②雨池、③奈良沢、④上倉、⑤市ノ口ガニ沢上、⑥大聖寺池、⑦城山、⑧十三ヶ丘、⑨楯池、⑩大窪、⑪牛首、⑫有尾古墳、⑬小丸古墳等が記載されている。その後の調査によって若干の遺跡を私達は追加し得た。以下に北町遺跡をとりまく飯山地区に存在する遺跡についても概観してみよう。ただ、飯山地区に接近する秋津地区、柳原地区、木島地区についても若干触れることを予めお断りしておきたい。

千曲川の氾濫原である飯山地区に人類の活動の痕跡が初めて刻されたのは旧石器時代であった。北町遺跡と指呼の間にある城山遺跡（飯山城跡）(39)がそれである。城山は戦国時代上杉謙信が、信濃の最後の拠点として飯山城を構築した所である。この城跡の三の丸北側を掘削した折に1点の頁岩製の縦長フレイクが出土した。当時工事に従事した人の話によると同様なものが数点出土したらしいが、現存しているのは1点のみである。

学史的にみると対岸の木島地区安田神社境内(37)から発見されたという黒曜石製のマイクロコアが著名である。さらに隣接する柳原地区では針湖池周辺から彫器や石刃が出土している。北町遺跡の北方1.5kmほど距てた長者窪(12)でも黒曜石製のフレイクが採集されている。また、有尾

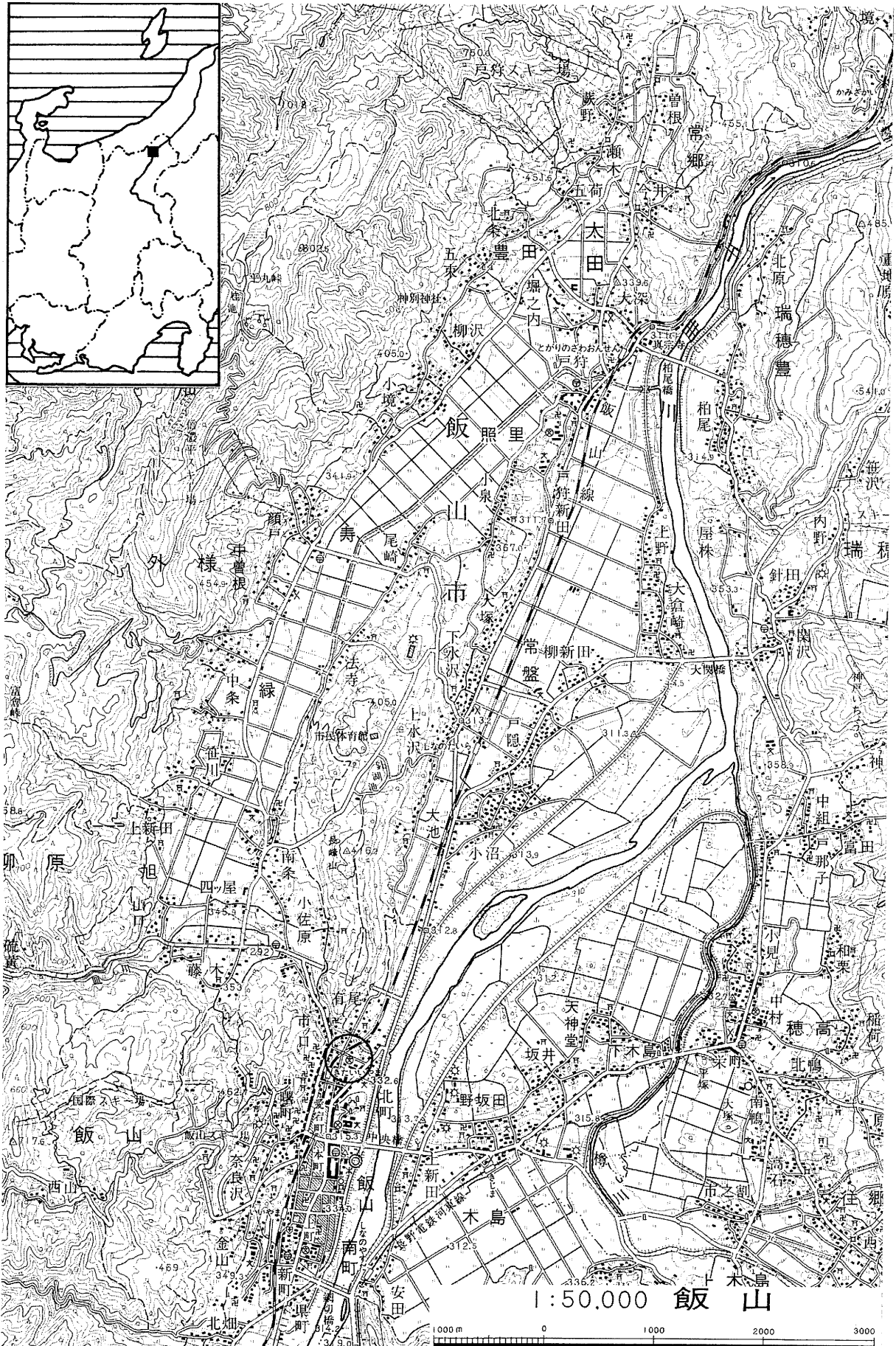


図1 北町遺跡の位置 (1 : 50,000)

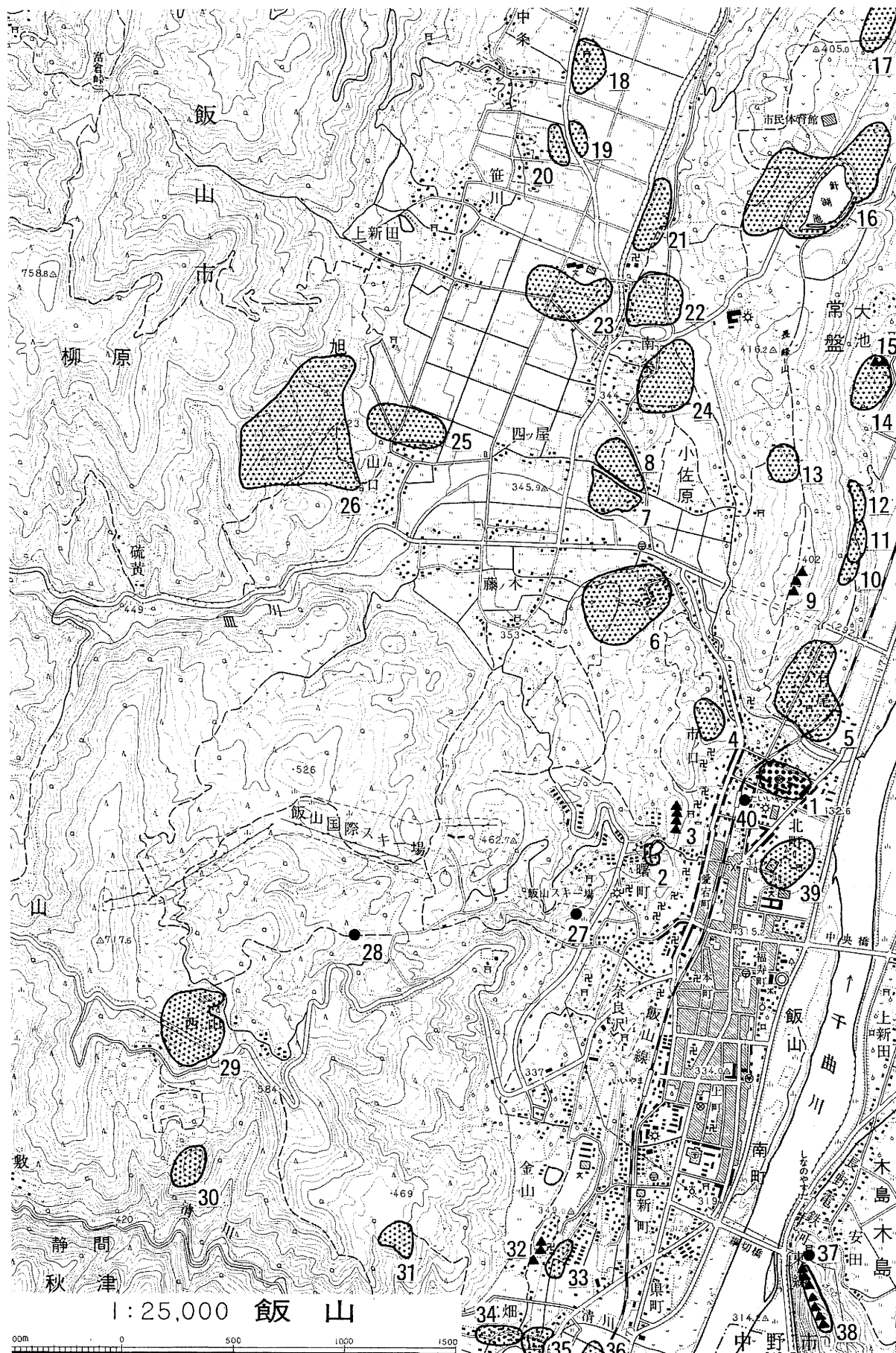


図2 周辺遺跡分布図

遺跡(5)は縄文前期の標式遺跡として著名であるが、昭和62年の発掘調査では、搔器や刃器が発見されている。このように飯山地区を中心とした所にも旧石器文化の存在が次第に確認されつつあり、今後の調査次第によっては良好な遺跡が私達の眼前に出現する可能性が強い。

縄文時代についてみれば、隣接の柳原地区小佐原(7)、針湖池(16)周辺等で草創期の表裏縄文土器の良好な資料が得られている。また、神明丘のジャンプ台付近(27)や十三ヶ丘遺跡(29)で押型文土器が、長者窪遺跡では条痕文系の土器が採集されている。縄文前期に入ると何といても有尾遺跡があげられる。飯山線敷設の折に多量の土器が出土したため注目されたようであるが縄文前期の遺跡として注目を浴びるにいたったのは、飯山北高等学校郷土研究会がこの遺跡に注目してからである。有尾遺跡の最初の報告者は当時飯山北高等学校郷土研究会の有力メンバーだった田中清見氏である。それは昭和24年のことであった。昭和27年11月飯山町誌編纂事業の一環として故神田五六氏が飯笠山神社境内東側の一隅を調査され、円形プランの住居址一軒、有尾式土器及び同時期の良好な資料を得られたのである。縄文前期の遺跡としてはこの他に須多ヶ峯(6)、十三ヶ丘、長者窪があげられる。

縄文中期初頭の遺跡として須多ヶ峯をあげることができる。昭和40年須多峯台地に県営住宅団地が造成されることとなり、昭和40・41年に地均し工事が行われた。その折に縄文中期初頭土器が多量に出土した。出土した土器は北陸地方に親縁性をもつものが多く、同時に関東地方の影響を受けた土器もあり、飯山地方の縄文中期文化成立を考える上で重要な資料を私達にあたえてくれている。平成6年の発掘調査では、中期前葉の土器と住居址が検出されている。縄文中期、後期の遺跡として須多ヶ峯(初頭土器出土地点とは若干離れている)、有尾、十三ヶ丘等がある。縄文後期の遺跡は現在のところ飯山地区では発見されていない。

飯山地区の弥生時代遺跡は、凹地を望む微高地あるいは高台に集中する。たとえば城山西側台地、雨池北(2)、有尾、今回調査した北町がその代表である。これに対して十三ヶ丘のように低湿地帯を全く離れて高原状を呈する地点に位置するものもある。この両者のあり方は弥生式文化の性格を考える上に興味あるところである。

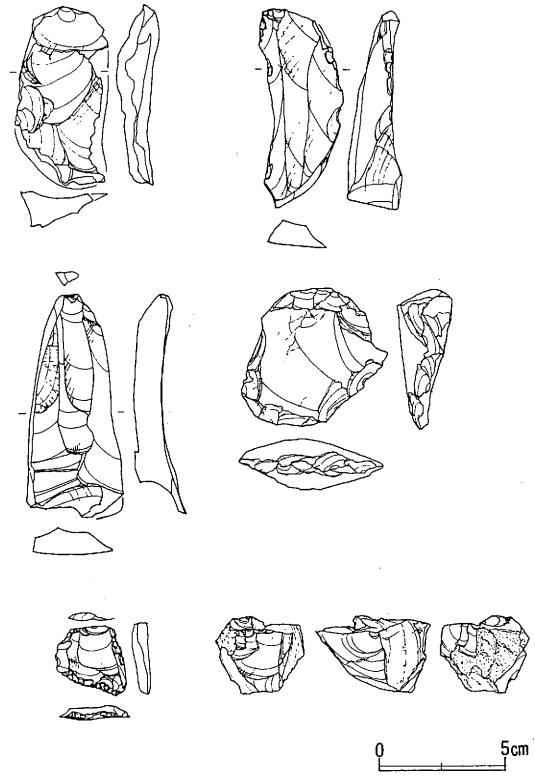
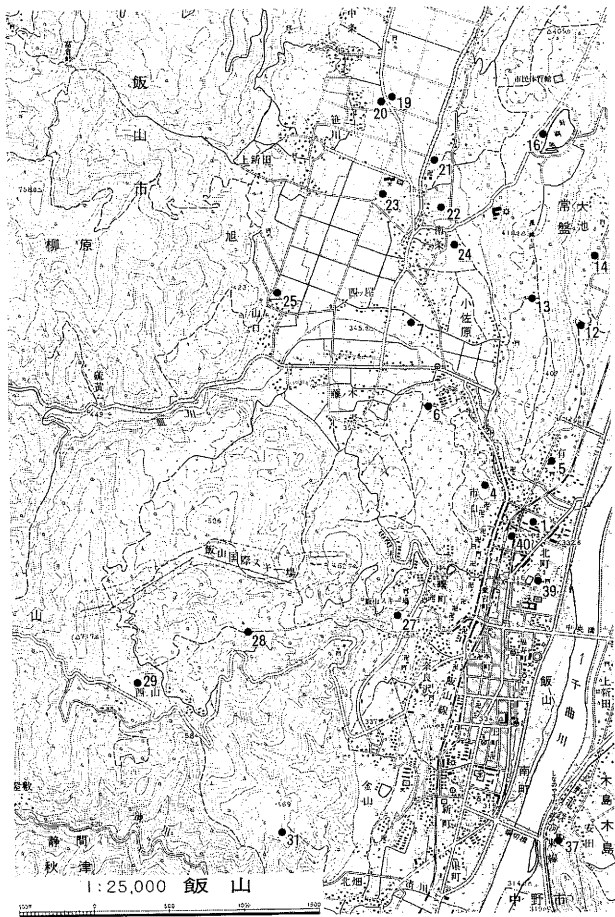
次に古墳時代について触れよう。古墳ではまず有尾古墳があげられる。長峰丘陵南端の丘頂上に存在する。現在3基が確認されている。その中で1号墳は、長野県最北端の帆立貝式の前方後円墳として知られていた。しかし該古墳は測量調査の結果、前方後円墳であることが明らかとなった。飯山市の指定史跡となっている。2、3号墳は明らかに円墳であり、特に2号墳は明確に円墳としての形状をとどめ小丸古墳と称されている。神明町裏山にも4基の古墳がある。1・2号墳は円墳とされているが、前方後円墳及び前方後方墳の性格を有するとの説もあり今後の課題といえよう。3号墳は方墳、4号墳は円墳である。この中で4号墳は、昭和25年飯山北高等学校郷土研究会によって調査され、古墳を再利用した経塚であることが判明している。飯山地区では以上7基の古墳が確認されている。

次に古墳時代の遺跡についてみると、何といても須多ヶ峯があげられる。弥生式後期に所属する2基の方形周溝墓に接近して、柳町期の3軒の住居址及び土器、砥石等が検出されている。また須多ヶ峯遺跡では平成6年の発掘調査により、古墳時代前期住居址4軒、掘立柱建物址2軒が検出されている。降って鬼高期のものとしては桐原健氏が調査した有尾遺跡がある。この有尾遺跡は縄文前期の有尾遺跡より東北方150mほど距てた所に位置している。

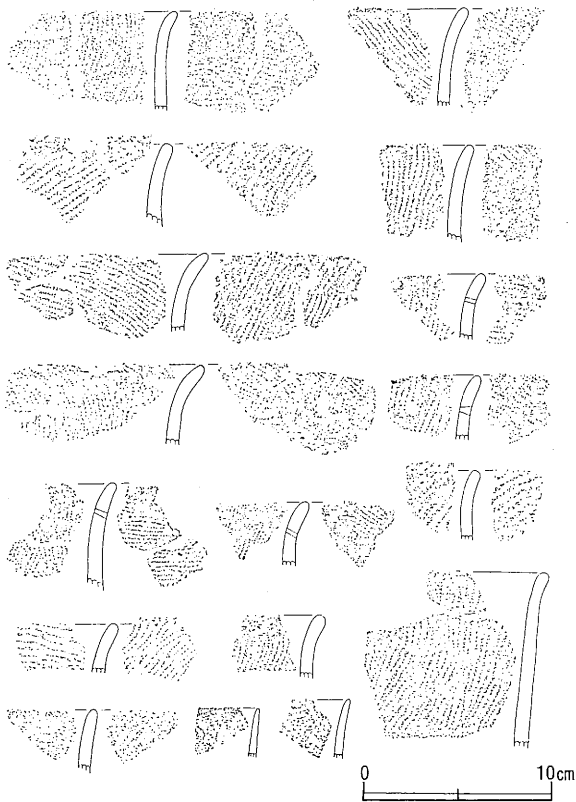
歴史時代に入る黄金石上(10)、長者窪、林子畑(11)、有尾等が知られている。いずれも平安時代に属するものである。これ等の遺跡はいずれも保存状態が良好であり今後の調査が期待される。

中世遺跡としては、まず飯山城跡が挙げられる。在地の豪族泉氏の居館であったが、戦国期に上杉氏の前進基地として整備された。後に飯山城下として周辺が整備されていくこととなる。したがって、飯山市街地の多くは中世末から近世にかけての遺跡地といえるが、住宅が密集しておりこれまで調査されてはいない。

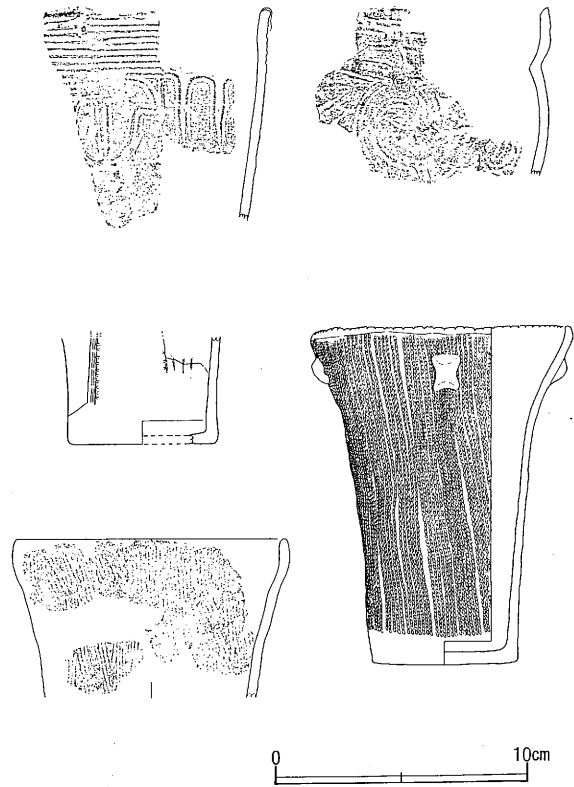
この時期の遺跡としては、有尾遺跡がある。昭和62年の発掘調査により中世と推定される大型掘立柱建物群が検出され、飯山城との関連も指摘される。今後、中世から近世にかけての当該地区の調査・研究が必要となってこよう。



5 有尾遺跡

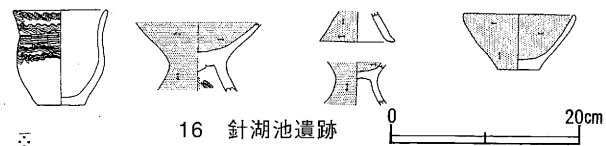
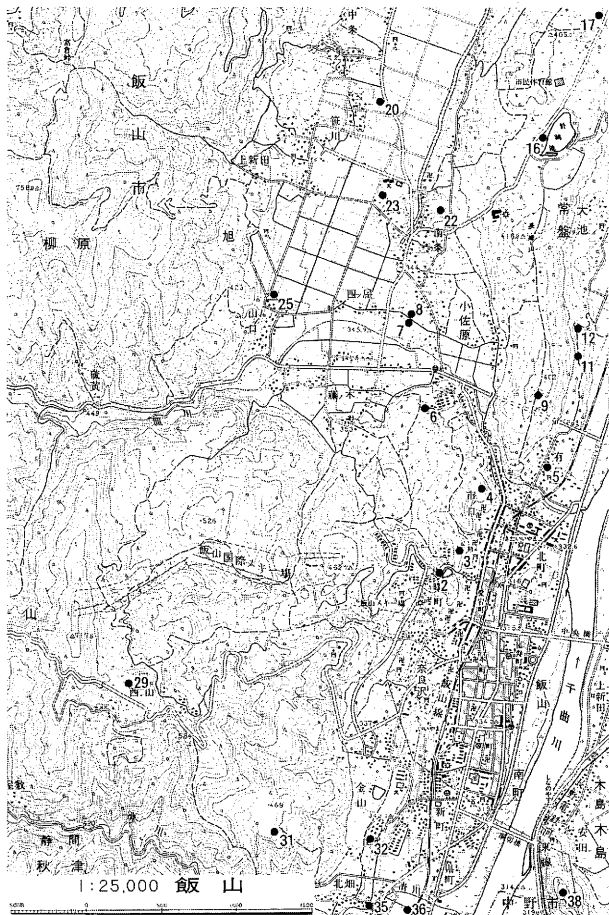


6 小佐原遺跡 (広瀬 1981)

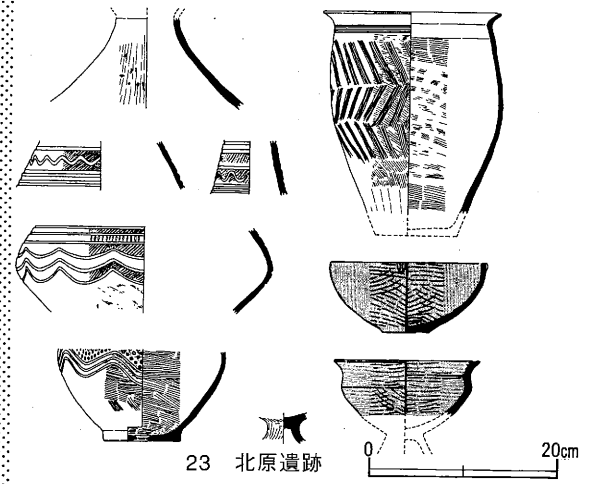


7 須多ヶ峯遺跡

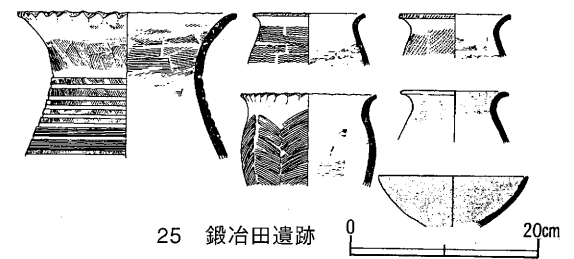
図3 周辺の旧石器・縄文時代遺跡



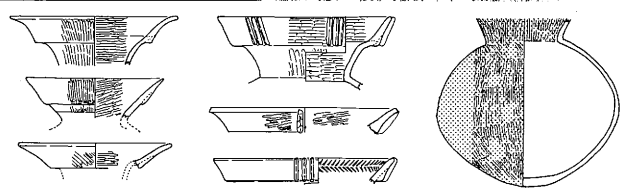
16 針湖遺跡



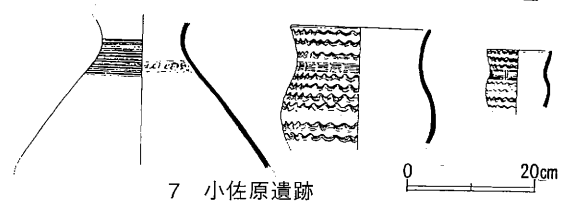
23 北原遺跡



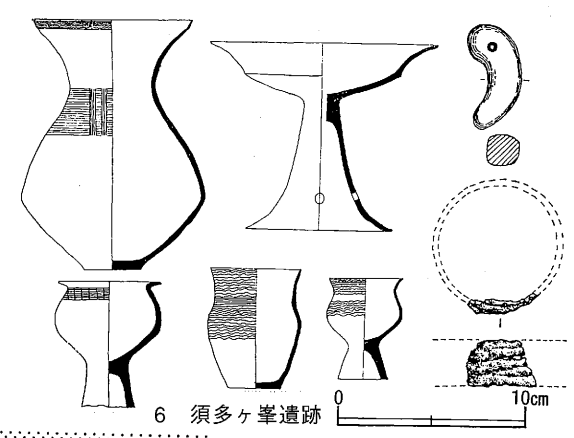
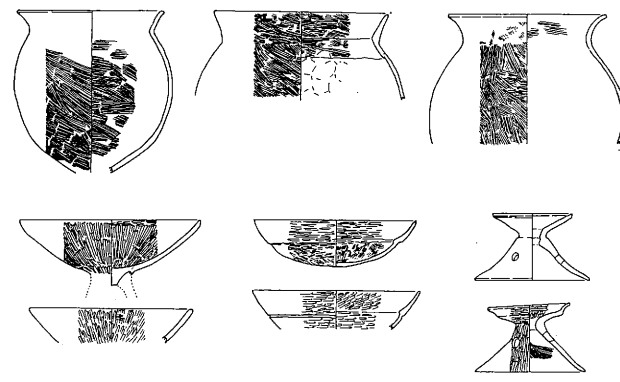
25 鍛冶田遺跡



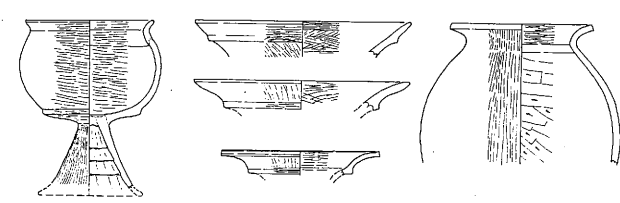
6 須多ヶ峯遺跡



7 小佐原遺跡



6 須多ヶ峯遺跡



5 有尾遺跡

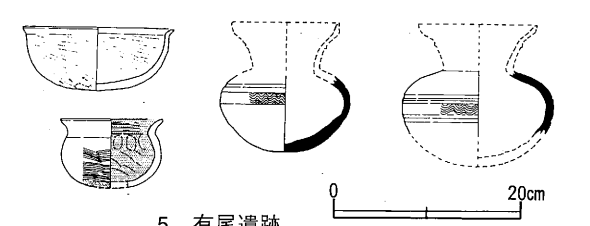
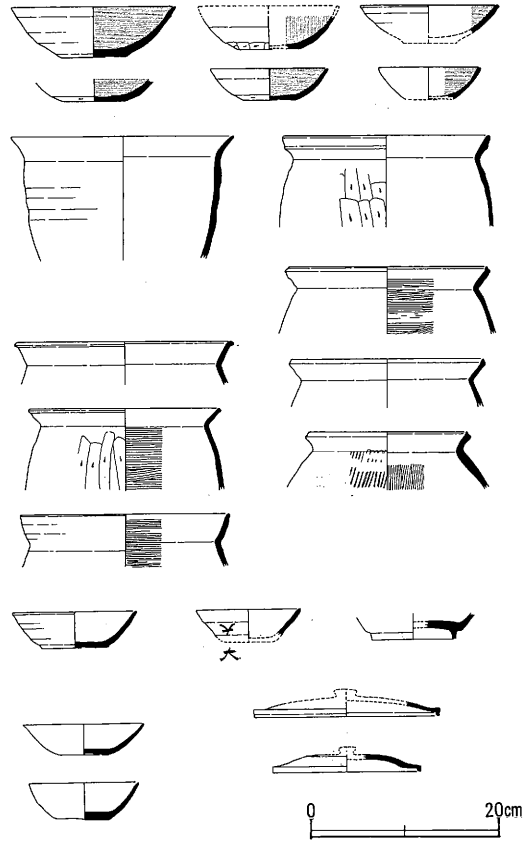
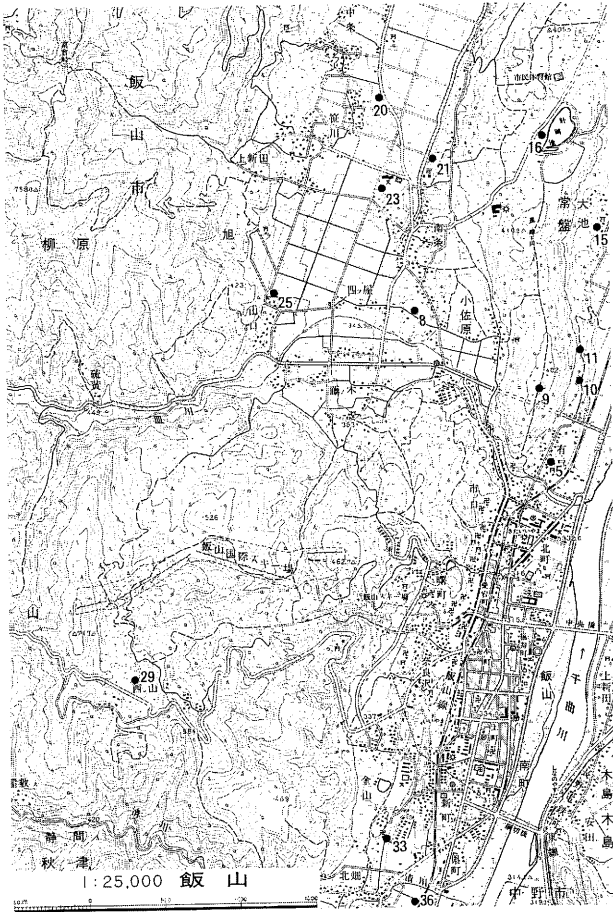
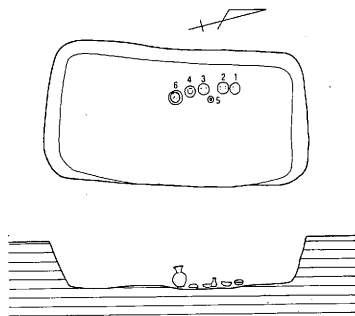


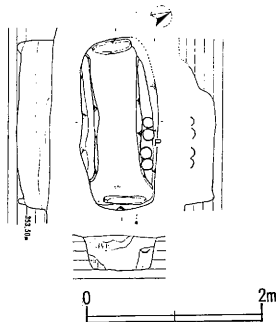
図4 周辺の弥生・古墳時代遺跡



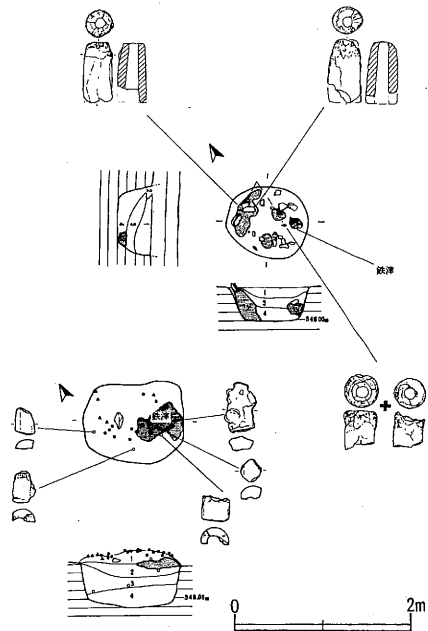
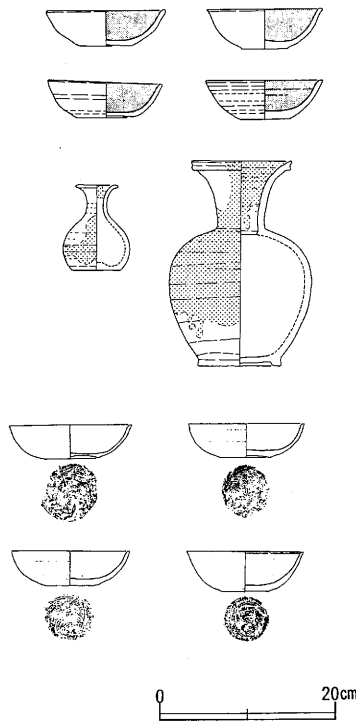
23 北原遺跡



7 小佐原遺跡

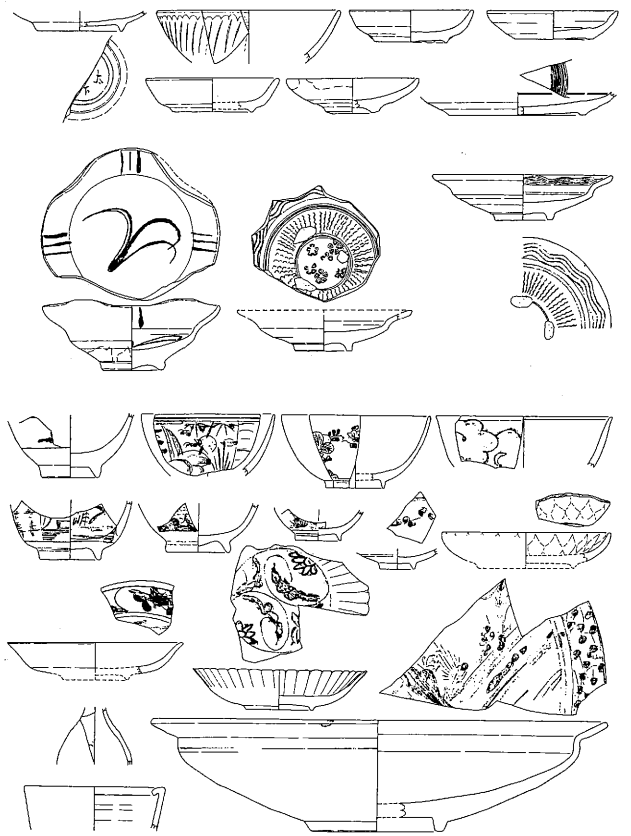
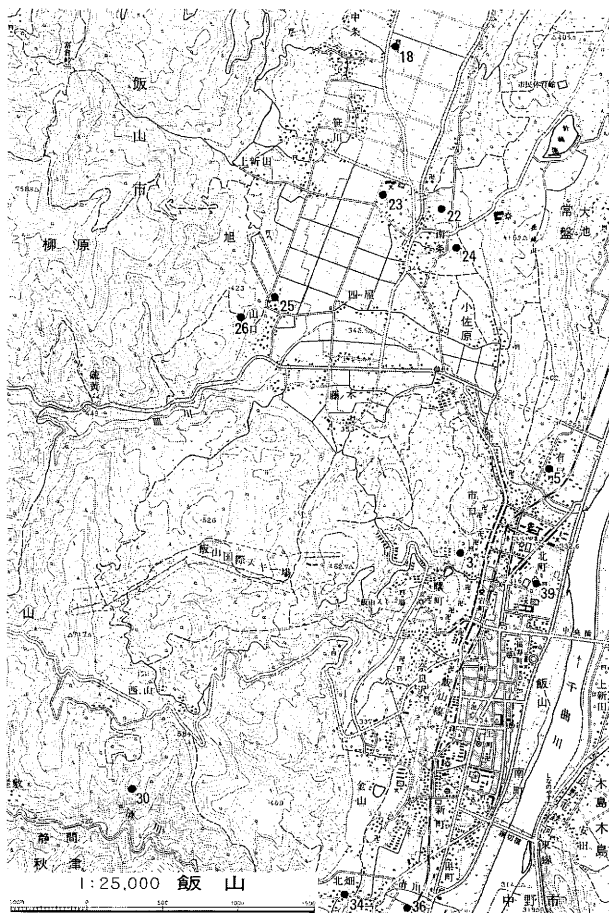


25 鍛冶田遺跡

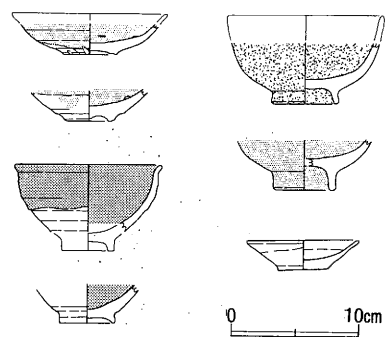
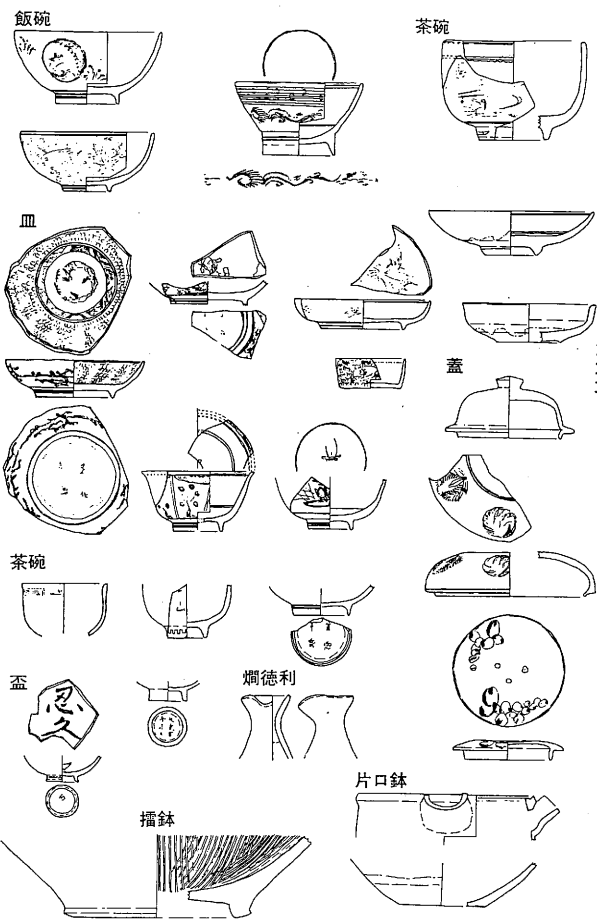


23 北原遺跡

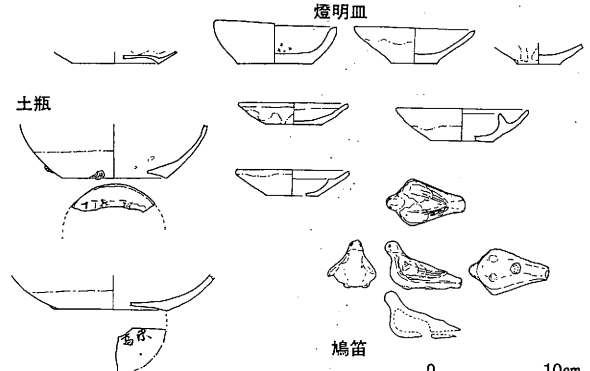
図5 周辺の平安時代遺跡



22 南條遺跡



5 有尾遺跡



39 飯山城跡

図6 周辺の中・近世遺跡

番号	遺跡名	旧石器	縄文					弥生		古墳			奈良・平安	中・近世	備考 (発掘調査・特記事項)
			草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	中期	後期	前期	中期			
1	北町							●			●		●	●	S58 調査・本報告
2	雨池北							○	○						
3	神明町										○			●	古墳4基・経塚
4	ガニ沢上				○				○						
5	有尾	●		●	●			●	●	●	●	●	●	●	S42.27.35.62 調査
6	須多ヶ峯			●	●			●	●	●					S40.41.45.H6 調査 方形周溝墓
7	小佐原		●					●	●						S44 調査・表裏縄文 平安木棺墓
8	鬼ヶ峰								○						
9	有尾古墳群									○	○	○			
10	黄金石上												●		S38 調査
11	林子畑											○	○		
12	長者窪	○		○				○						○	
13	(仮)長峰	○													
14	お茶屋				○										
15	大池古墳群											○			
16	針湖池	○	○	○	○		●		○	●				○	H9.10 調査
17	西長峰								●	●					S25 調査
18	布施田													○	
19	笹川				○										
20	別府原				●							●	●		S43 調査
21	正行寺北			○										○	
22	南条				●					●				●	H11 調査
23	北原							●	●					●	S53.56.59 調査 平安期鍛冶炉
24	東源寺	○												○	
25	鍛冶田		●						●					●	S54 調査
26	山口城													○	
27	飯山シャンツェ下				○										
28	直坂			○	○										
29	十三ヶ丘		○	○	○	○			○					○	
30	静間館												○	●	
31	北畑北				○					●		○			
32	法伝寺古墳群														3基
33	法伝寺													○	
34	北畑館												○	○	
35	北畑								○		○		○		
36	中町郷谷													○	○
37	安田神社	○													
38	飯綱山古墳群											○			円墳24基
39	飯山城跡	○												●	H4 調査・飯山藩主居城
40	北飯山				○										

表1 周辺遺跡地名表

引用・参考文献

- 田中 清見 「飯山市有尾遺跡発掘概報」 下水内郡遺跡発掘調査報告書 1950
飯山公民館 「飯山町誌」 1954
信濃史料刊行会 「信濃史料」 第1巻上下 1956
高橋 桂 「北信濃須多ヶ峯弥生式墓坑調査略報」 考古学雑誌 51 - 3 1966
高橋 桂 「北信濃城端遺跡調査略報」 信濃 21 - 7 1969
飯山北高地歴部OB会 「遺跡分布調査報告 I」 1977
飯山市教育委員会 「北原遺跡調査報告書」 1980
飯山市教育委員会 「鍛冶田」 1980
広瀬 昭弘 「小佐原遺跡」 長野県史考古資料編全1巻(2) 主要遺跡 北・東信 所有 長野県史刊行会 1982
高橋 桂 「須多ヶ峯遺跡」 長野県史考古資料編全1巻(2) 主要遺跡 北・東信 所有 長野県史刊行会
1982 飯山市教育委員会 「北町遺跡」 1984
飯山市教育委員会 「北原遺跡Ⅳ」 1985
飯山市教育委員会 「飯山の遺跡」 1986
飯山市教育委員会 「有尾遺跡」 1992
飯山市・飯山市教育委員会 「飯山城跡」 1994
飯山市教育委員会・長野県北信地方事務所 「須多ヶ峯遺跡」 1995
飯山市教育委員会 「南條遺跡」 2000

第Ⅱ章 経 過

第1節 調査にいたるまでの経過

県立飯山北高等学校体育館の改築計画は以前から計画されており、県教育委員会が次年度以降の公共事業の照会調査では、平成10年度に12年度実施として提出されている。以下、経緯について触れる。

平成10年10月の県教委による現地協議では、事前に発掘調査を実施して記録保存を図るということで、市教委・県教委・県高校教育課・飯山北高等学校で合意された。

平成12年4月、先に合意されてから時間的に経過したこともあり、改めて協議を行うこととなった。

4月27日 県高校教育課吉沢氏、県教育委員会廣瀬指導主事、高橋桂飯山市文化財保護審議会長、飯山北高等学校事務長補佐中沢氏および市教委事務局員が飯山市役所において協議を行った結果、下記のような意見が出された。

県高校教育課・飯山北高等学校 現在の体育館は昭和35年に建設され、耐用年数過ぎたので新たに建設することとなった。現在の規模よりやや大きくなる。計画では7・8月に解体し、9・10月の二ヶ月間を埋蔵文化財の調査期間に充てたい。降雪の関係もあり、11月から杭打ちの工事に入りたい。なお、飯山北高等学校百周年にあわせて完成するというので、工期を延ばすことはできないのでご協力いただきたい。

文化財保護審議会長 昭和58年に格技室建設で発掘調査を行った結果、弥生中期の遺物が検出されている。また、部室や合宿所建設に際しては、建物があり破壊されていたが遺物が出土した。したがって今回も遺構や遺物が発見される可能性は大きいと思う。

県教委指導主事 協議は平成10年にも行われている。そのときには、工事によって遺跡が破壊される前に調査を行い、費用は県高校教育課が負担するということが決められていたが、いつ予算付けが行われるかはっきりしなかったので、今回まで経過してきた。調査は二ヶ月で終了することができるか。また、解体工事が予定通り進まない、調査期間が狭められてしまう。解体工事は遅れることなく、早まるくらいで進めてほしい。また、安全対策についても考慮願いたい。

結果、工事着手前に記録保存のための発掘調査を行う。期間は、本年9、10月の二ヶ月とする。費用は高校教育課の負担とする、等正式に決定した。

5月16日 飯山北高等学校より法第57条の通知書が提出される。

5月29日 県教育委員会教育長より飯山市教育委員会教育長あて、「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」(12教文18-12号)の通知がある。

7月6日 飯山北高等学校長富井捷人と飯山市長小山邦武との間で、発掘調査の委託契約書を締結する。

9月29日 住宅部施設課飯島専門幹兼技術専門員、飯山北高等学校事務長・同中澤事務長補佐、市教委望月が、解体工事状況及び発掘調査の細部について打ち合わせを行う。

10月5日 発掘調査に伴う調査団長に高橋桂氏、調査員に竹田保夫氏の委嘱を行う。同時に発掘作業員を市内経験者に依頼。

以降、発掘調査の準備をすすめる。

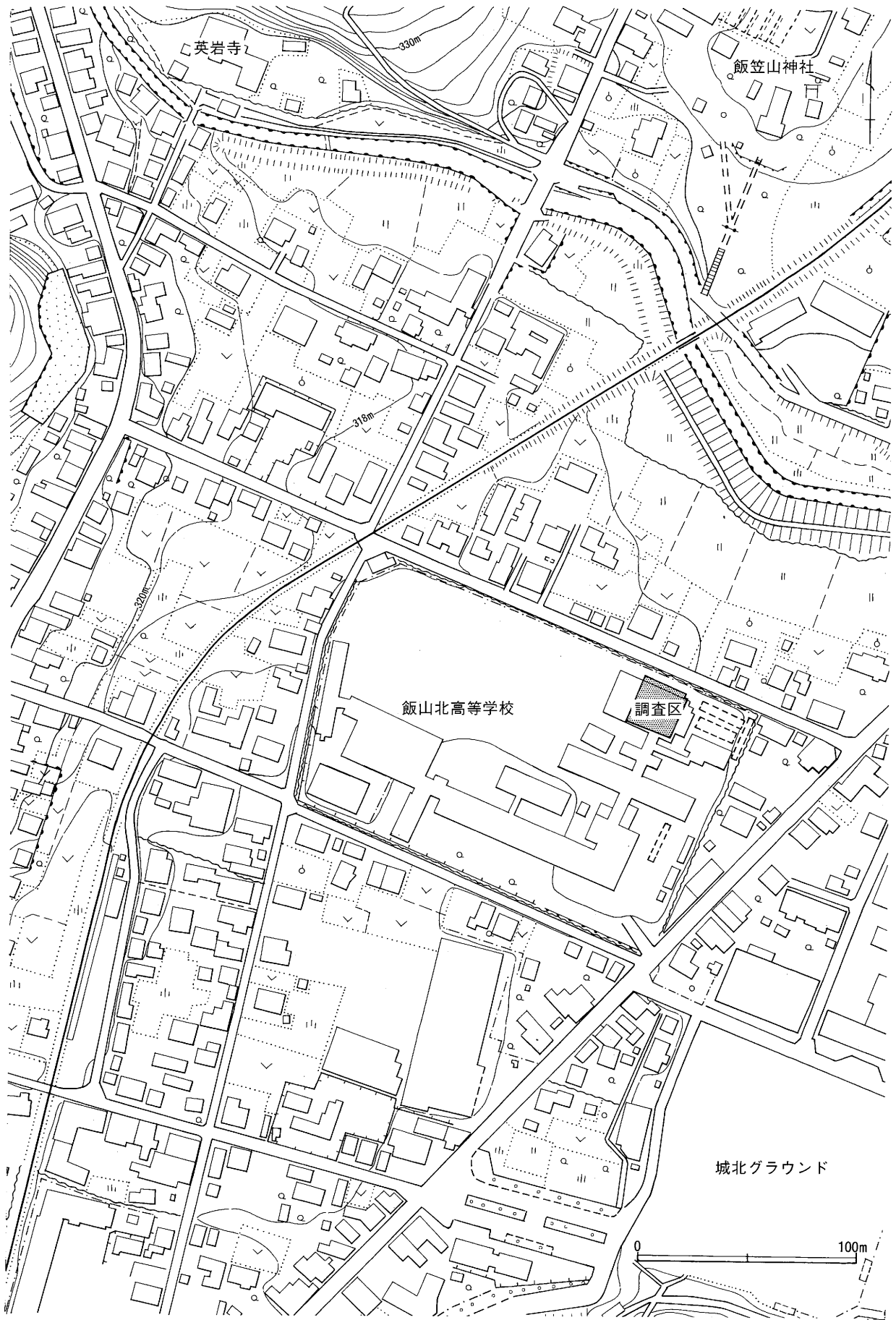


図7 北町遺跡周辺地形図 (1:2,500)

第2節 調査経過

2000（平成12）年

10月

16日（月） 現地打合せ

17日（火） 器材搬入。テント設営。土俵除去開始。調査地区全体で近世の層は攪乱されているため当初近世の住居跡があると思われたが確認できなかった。攪乱層から近世から弥生時代までの遺物が確認された。表土除去状況を撮影。

18日（水） 表土除去。残土置場がないため調査地区の半分を残土置場とし、その地区は調査終了後発掘することにした。表土は古墳時代上部の層まで入っていると思われる層まで行った。円形の遺構を6基検出。調査地区北側に土師器の集中した個所が検出され、調査地区全体に土師器片が散在しているのが確認できた。

23日（月） 雨のため午前中で作業中止。開始式を9時より行い終了後、調査の打合せ。雨で現場が水没したためポンプで水の汲み出しを行う。グリットを5m間隔で設定する。

24日（火） 前日の雨のため引き続きポンプによる水の汲み出しを行う。現場の水没は雨だけではなく南地区の攪乱部分から湧水があると思われる。前日に引き続きグリットの設定を行う。水に浸っていない個所の検出を行う。グリットC-5に方形、円形のピットを確認。

25日（水） 雨のため作業中止。

26日（木） ポンプで水を汲み出しながら攪乱部を一部掘り下げ、湧水の溜まる場所を設ける。検出面は土壌が粘土質のため水溜りになりやすく前日の雨で所々出来た水溜りをスポンジで水を取りながら検出を行う。

ベンチマークを316.5mで設定する。

27日（金） 前日の雨の水溜りをスポンジで取り、グリットC-4・5の検出を行う。検出されたピット、8基の円形遺構を実測する。

ピット、円形の遺構の覆土色調は灰色をA、明褐色に橙色の粒が入る（黄橙色）ピットをBとする。グリットC-5は薄く黄橙色土層が残っているが他の地区はその下の黒褐色土層が出ている。C-5にピット状遺構が集中、地域分けされているのが確認出来る。

円形遺構の検出を撮影。

円形遺構

SK-1 (B)

SK-2 (A, B) 覆土は壁際に灰色土10cmで中央部が橙色土

SK-3 (B) 径が約2mで円形遺構では一番大きい。中央にある数点の河原石は攪乱か。井戸と思われる。

SK-4 (A)

SK-5 (A) 土俵除去の時、遺構の上部に木片が円形状に確認、桶か。

SK-6 (A) 地形の落ち込みかもしれない。

SK-7 (B)

SK-8 (B) 覆土が灰色のピット状遺構が切り合っている。

31日（火） SK-4, 5, 6を半掘する。終了後セクション実測、写真撮影等記録作業を実地した後、全掘する。SK-4, 5は深さ10cm程、SK-6は1cmで底

の部位と思われる。

SK-5には樽状の木片が覆土に多数含まれる。

SK-4, 5, 6, SK-8に切り合いにするピット状遺構は覆土が灰色で同じ時期と思われる。

11月

6日(月)

午前中水の汲み出しをする。

午前までの雨でSK遺構掘り残しに冠水し掘れる状態ではないため、グリットC-5を検出し直しピット状遺構を全掘し始める。

C-5内、ピット1・2の底部に10cmの敷石があり、覆土は褐色土に橙色粒を多く含み土師器を数点包含する。

北側、土器集中の範囲を確認する精査をする。

土器集中は土師器の上に一個体と思われる須恵器がつぶれた状態であり範囲は3m程で中央部にL字状に攪乱が入っている。

7日(火)

前日に引き続き、土器集中の精査とピット状遺構の全掘作業をし作業をし、土器集中Loc1出土状態の写真撮影、ピット状遺構の平面実測を行う。

土器集中北東側に1基のピット状遺構、東側に須恵器の杯の底部が確認。

F-3, 4, E-3, 4内の土器集中をLoc1とする。

8日(水)

雨のため3時間程しか作業ができず、主にピット状遺構掘りの作業をする。

C-5内ピット3, C-6内ピット1より土器、フレイクが出土。石器はC-5・6より出土する石器と同じ石材と思われる土器は櫛描文が施されている。

C-5, 6の平面図実測する。

9日(木)

前日に雨の汲み出し作業をし、土器集中Loc1の個体集中部を残して周辺に散らばっている土器を点をおとして取り上げ、SK、ピット遺構の掘りの作業をする。土器集中部の中程からミニチュア土器が出土。SKのセクション実測、写真撮影を行う。

10日(金)

ピット状遺構全景写真を撮るため薄く掻き撮影を行う。

トレンチで確認出来た遺物包含層は、土師器が黒褐色層でその下の黄橙色層に弥生時代の土器が包含される。東壁面のセクションに黒褐色層が30cm程落ち込んでいるのが遺構か地形的落ち込みか。

14日(火)

午前中、高橋調査団長指導。

土器集中Loc1を写真が撮れるように土器を洗い撮影し、点をおとし土器を取り上げる。

グリットC-5, 6を掘り下げ遺構確認する。

トレンチの北壁面に西から東に落ち込みが2層になりその下の層の間に焼土を視認出来た。

15日(水)

前日に残した土器集中の土器を取り上げ、終了後集中部下にトレンチを入れ遺構確認をするが遺構は認められなかった。

近世と思われる遺構をSK-9とし掘り始める。灯明皿と思われるカワラケ、灰釉陶器、木片が出土。

土器集中Loc2・3・4(黒褐色土層内)を検出。土器集中Loc3の取り上げも崩れるほど脆い。

16日(木)

前日に引き続きグリットC-5・6の黒褐色土を取り除く作業をする。西方部に下の層が露呈しているため千曲川の方に地形が落ち込んでいると思われたが方形の遺構が検出された。

遺構の検出面、グリットベルトを基に土層観察用ベルトを設けて掘削する。

竪穴住居址と思われる遺構は方形で壁際に15～6cmの黒色が帯状にあり壁材の跡であろうか。遺構北側外に形30cmの円形（黒色）が視認できる、屋根を支える柱穴か。南側は攪乱部になるためカマドが残存している可能性は低いがトレンチ内に焦土が確認出来るためカマドは西側か。

10cm程のレベルで北西部角に円形の白灰色を視認。

写真撮影、土器集中No 2・3・4を行い、土器集中Loc2は撮影後一括取上げをする。

土器集中No 3・4の下部に不定形な落ち込みを確認する。土器を残し黒褐色土を取り除く作業を始める。

20日（月）

竪穴住居址内の覆土を取り除き床面を確認する作業を先週に引き続き行う。検出面より10cm程下より土器を多数と骨片を含む黒色炭化層が壁より2～30cm内側に50cm幅で円形（リング状）に視認する。

住居址外側北と西に円形と方形のピットが1基あり住居址の関連施設であろうか。最大2mmの骨片の範囲は日没のため確認できず。東側、西側と南側を掘り下げて住居址の範囲を確認する。住居址の形状は方形で一辺が5mの正方形で時期は古墳時代であろうか。

ベルト南側からコアが出土。

21日（火）

北側コーナー内側に加熱され割れた石が数点点在する。

朝方までの雨で住居址内に冠水している水の汲み出しを行う。床面を壊す恐れがあるため住居址内に入れず、ベルトの南側とグリットD-5を掘り下げ遺構確認の作業を行う。検出面がはっきりしないが、広い落ち込みがあるようだ。

22日（水）

前日と同じく住居址内に入れずグリットD-5と住居址ベルト南側を掘り下げる。

住居址ベルト南側も北側と同様に黒色炭化層があるが、骨片は黒色炭化層ではなく下層の直上に散在し密度は北側に比べ薄いようである。

住居址外側にあるピットをピット5・6とし完掘する。覆土は黒褐色で住居址の覆土と同じで、包含されている土器も同じものと思われる。

前日、はっきりしなかった落ち込みは溝状、円形と瓢箪形でSK-10, SK-11とし完掘する。瓢箪形のSK-10は西東に縦軸が250cmあり西方底部に土師器の碗を伴い、覆土は黒褐色で深さ20cmである。円形のSK-11は検出面に土師器が数点点在し、覆土は黒褐色で計70cm、深さ30cmである。

近世遺構、SK-9より敷しめられた葦状の植物、木材が出土。

24日（金）

住居址内の覆土を取り除き遺構確認の作業をする。東側コーナーから南側にかけての床面が他の床面より一段高くなっているのが確認できる。柵状の施設か。

住居址内SK-1 西側コーナー60cm内方に位置し径80cmで覆土は暗灰茶色土で砂質、深さ床面から30cm程で、トレンチで以前確認済の遺構である。

SK-2 南側部分が攪乱が欠如しているため遺構の全形は把握できない。覆土は黄橙色に少しの黒色塊、多目の黄色塊が斑に混じる。粘土質。

遺構であるか今の時点では確認できないが、北西面内側に焦土混じりの炭

化物を含む落ち込み、他に柱穴、SK-1と同じ覆土をもつ落ち込み加熱されてある石下にも遺構らしき落ち込みが確認される。

SK-11, 溝状遺構を完掘する。溝状遺構は南北に4m程で南側で黒褐色土に消え北側は表土除去で消されているためその全形、住居址の関連施設かは明らかではないが、覆土等から同じ時期と思われる。

グリットD-4内の東西に70cm北南に20cmの範囲で平安と思われる土器集中をLoc6とする。

27日(月)

作業日程も後4日となり、教育委員会から2名の応援をいただき、SB-1内の水溜りをスポンジで吸い取り遺構検出、SK-9完掘作業を先週に引き続き行う。

SB-1. 中央部に比較的大きな骨片(約1cm)がある。

土器集中Loc6の取上げ(EL-148)

SK-10・11完掘撮影

トレンチのナンバー付け

トレンチNo.1. 調査区域北側壁1m(明褐色層中央に黒色層)

トレンチNo.2. 土器集1直下

トレンチNo.3. グリットC-5南西に1m方形

28日(火)

前日と同じく床面が水分を含み柔らかくへドロ状になっているためスポンジで叩きながら水分を吸い取り、住居址内の遺構完掘作業とセクション実測の後、ベルト外しの作業を行う。

SB-1, 西側壁に床面より3cmに焼土塊、粘土塊の層が確認される。別の遺構が切り合っているようである(トレンチ3の北壁に確認された焼土層)。

セクション-黒色炭化層の下に貼り床(暗灰色に黄色、黒色塊が斑と橙色粒を含む)

29日(水)

前日に引き続き土層観察用のベルトを外す。スポンジで水溜りの水を吸い取遺構を完掘し調査地区全体、SB-1を写真撮影する。

写真撮影終了後SB-1に切り合っている遺構のプランを確認するため掘り下げる。検出面で壁際に沿って帯状に黒色が視察された床面は確認されなかった。壁材とすれば壁材は床面まで達していないのであろうか。

煙道が西壁に北コーナーから南西3mに壁と垂直に長さ1m、幅25cmで、煙道断面は幅25cm, 左右に並行して1cm幅で煙道壁と思われる黒色炭化層が確認できる。上下の煙道は確認できなかった。覆土は明褐色土で黒色炭化層上と同じである。煙道から住居内に炭化物を多く含む不定形な落ち込みがあるがこれがカマド跡であろうか。カマドの石組、その落ち込み焦(焼)土帯等のカマド跡の痕跡は認められなかった。

西壁に北コーナーから約1m、検出面から3cm下に切り合いが縦にある。SB-1完掘後プランを確認、径約3mの円形の住居址と思われる。

住居址中央、貼り床下から弥生時代の打製石包丁検出。

調査日も明日を残すだけとなり、古墳時代住居址を完掘する。

30日(金)

前日に検出した弥生時代の竪穴住居址の覆土を除去し、床面を出し遺構を確認、遺構を全掘する。西側壁際に最大径が胴中央部上にある、櫛描文を有する甕が口縁を北に向けあり。北側壁際にコバルトブルーに色付いた平石(鉄平石)が長辺を壁につけ住居址内側に傾斜して出土。石面は使用された光沢があり住居入口ステップであろうか。

床面に瓢箪状の長軸約60cmの遺構と2基の約30cmの遺構があり全掘する。瓢箪状遺構部に焼土塊があり炉跡か。弥生時代円形竪穴住居址によくみられる周溝は確認できなかった。

10時より終了式を行い、終了後、器材を埋文センターに搬入して調査作業日程を終了する。

発掘調査は雨の日が多く実労日数が予定より大幅に短縮されたため十分な調査ができなかった。しかし調査終了間際ではあったが、古墳時代及び弥生時代の竪穴住居址が確認され住居空間がこの地まで及んでいることが認められたことの意義は大きいと言えよう。

12月初旬	補遺調査・片付け 整理作業
12月12日	発掘調査終了報告書提出
12月18日	埋蔵文化財拾得届・同保管証提出
2001（平成13）年	
1月	整理作業
2月	報告書作成作業
3月	報告書作成作業・報告書印刷製本・残務整理・完了

第2節 飯山北高等学校の経緯概説

県立飯山北高等学校の前身は、明治36年4月15日、長野中学校飯山分校として飯山小学校に敷設されたのを最初とする。5月11日に新校舎に移転、5月30日開校式をあげた。分校主任は長野中学校教諭足立敏太郎で、後独立とともに初代校長となっている。

その後曲折を経て、明治39年4月1日独立して飯山中学校となり、6月6日独立開校式が挙げられている。さらに昭和23年学制改革によって、飯山北高等学校となって今日に及んでいる（飯山町誌）。

明治36年に敷地7500坪を飯山町が寄付したとあることから、現在の敷地全部がこのときに中学校敷地として造成されたことになる。図8は飯山中学校時代の校舎配置図であり、昭和58年の調査では、当時の寄宿舍付近を発掘調査している（図9上）。厨房施設に伴う遺物やごみ穴等発見されている。今回の調査区には講堂が建てられており、戦前には北の中央部に突出して奉安殿が祀られていたらしい。その突出部分も今回の調査で現れている。そして、昭和35年に体育館が建てられ、平成12年に解体された。したがって、今回の場所は明治36年頃までは屋敷があったと推定される。以降は、少なくとも講堂、体育館建設に伴い2回の造成が行われたこととなる。

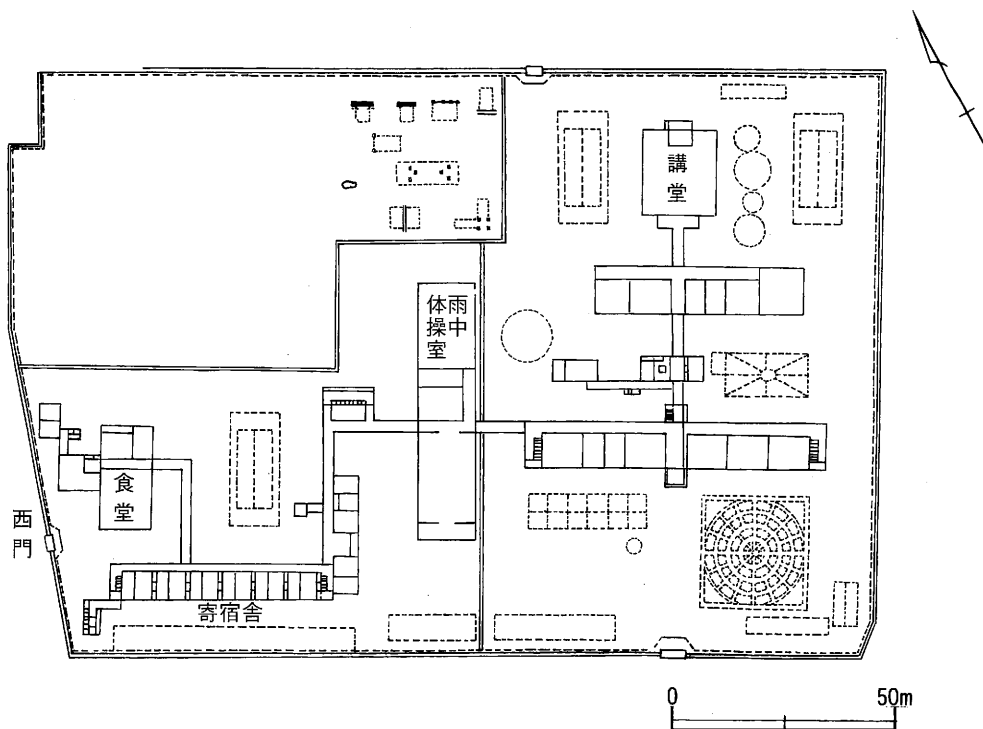


図8 長野県立飯山北高等学校校舎変遷図(1)

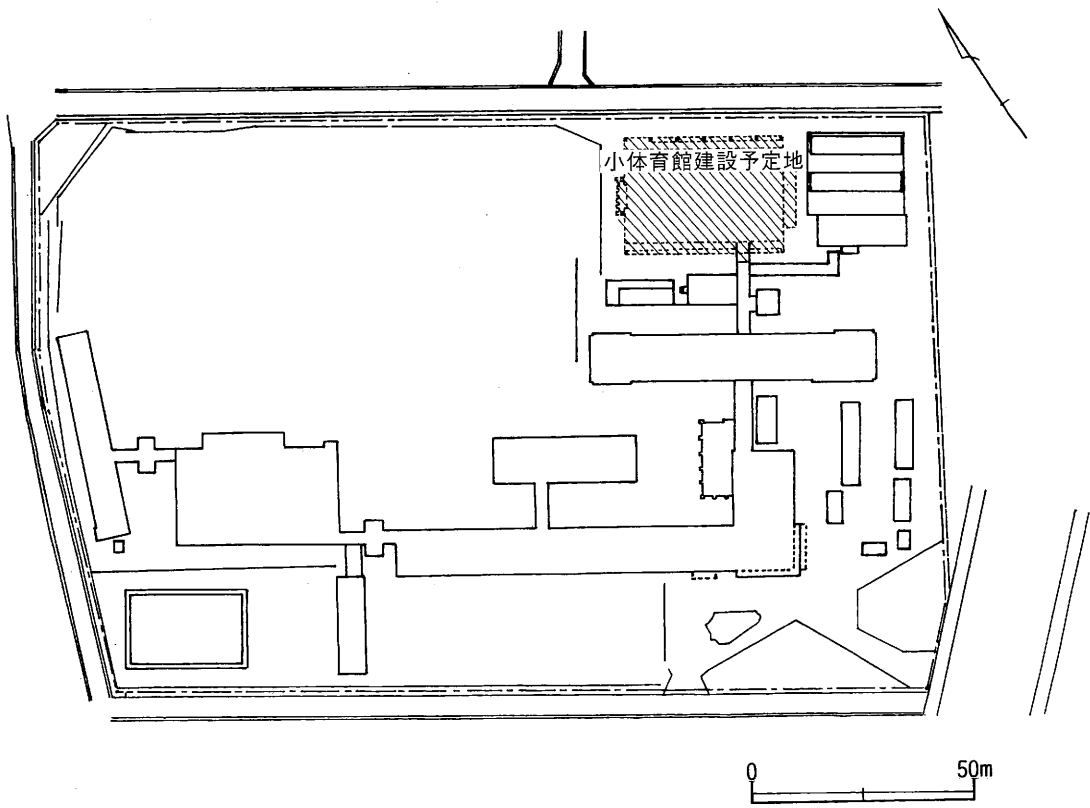
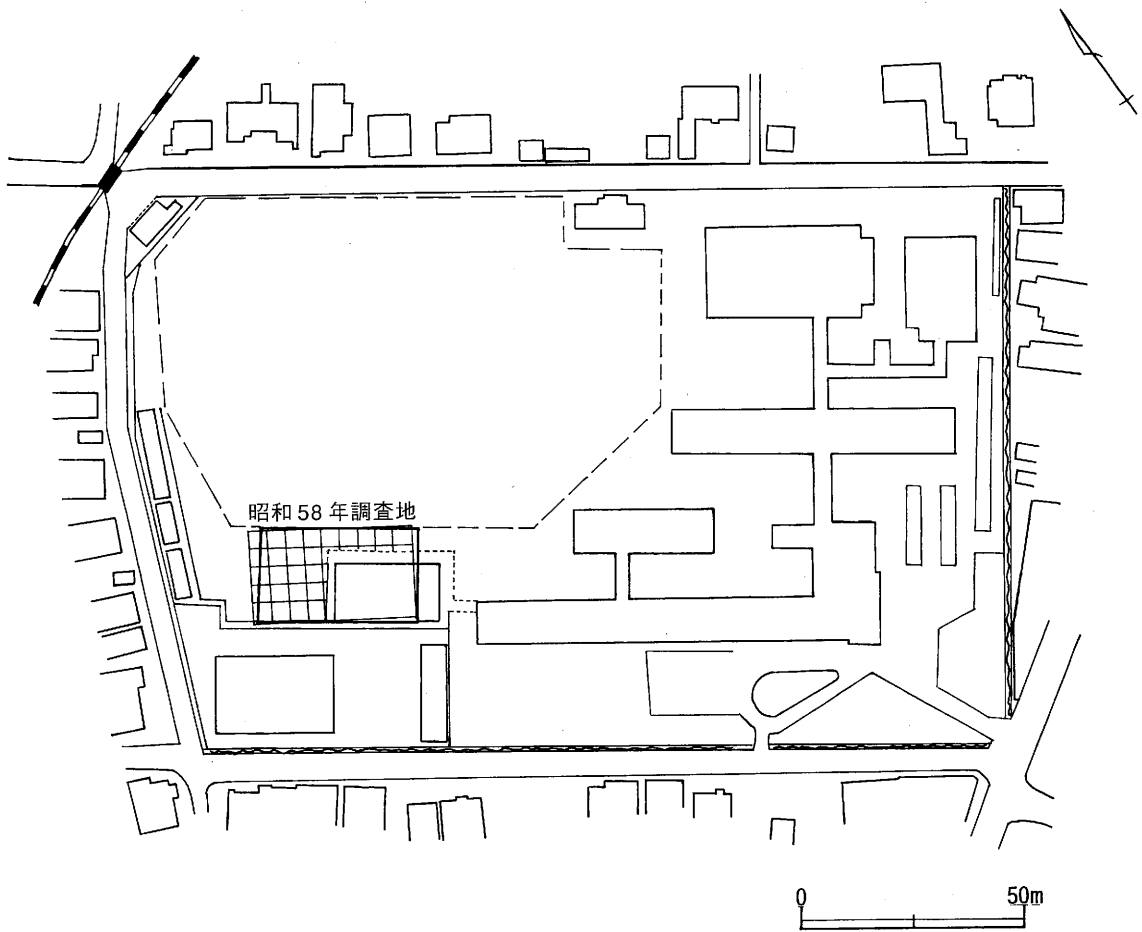


図9 長野県立飯山北高等学校校舎変遷図(2)

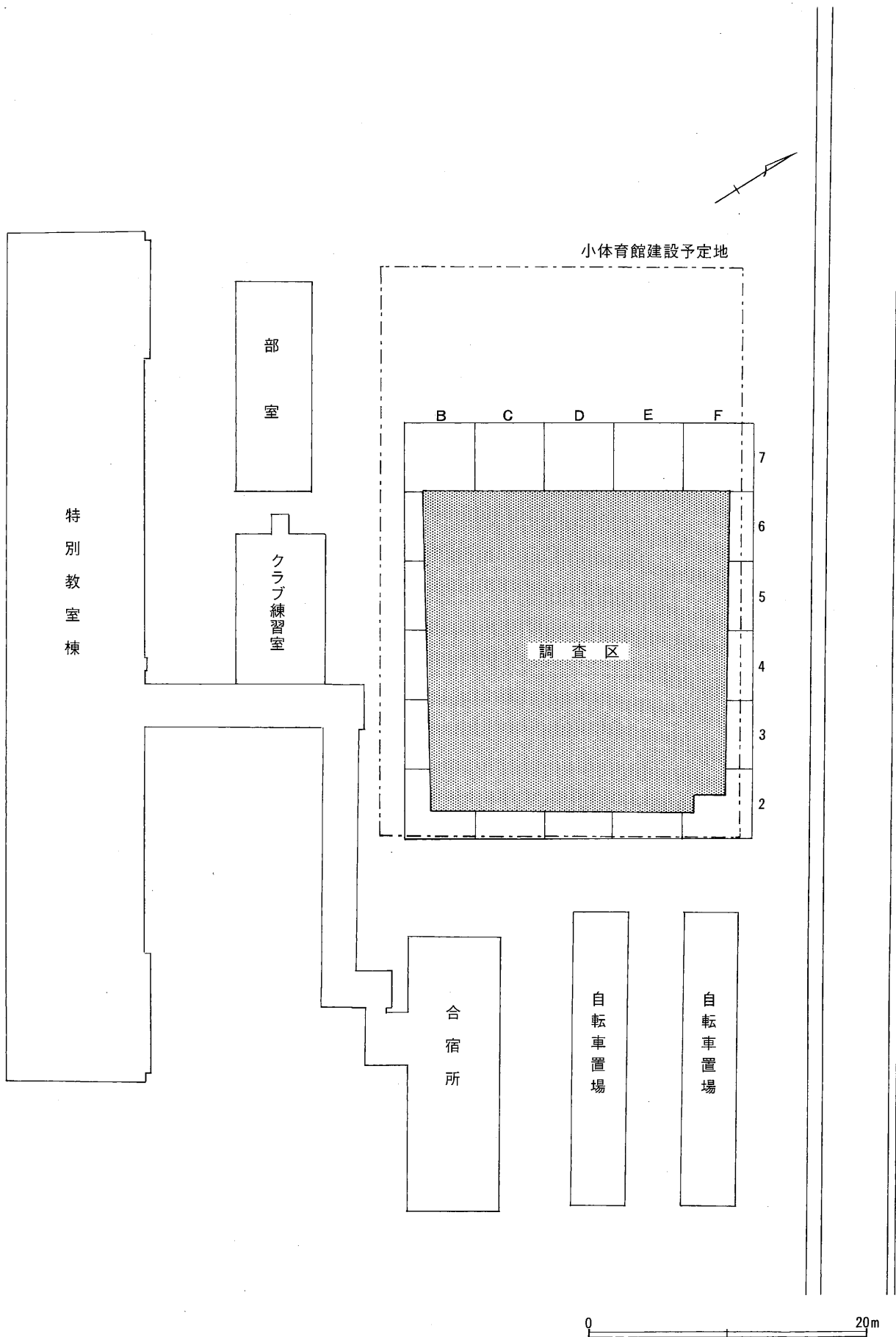


図10 調査区位置図 (1:400)

第三章 発見された遺構と遺物

第1節 概 要

今回の調査によって発見された遺構は表2のとおりである。体育館が建てられており、それ以前にも講堂等が建てられていたため、部分的には破壊を受けていた。また、地下水位が高く、付近の湧水地からの流入もあり常時水浸しの部分もあったために、地区全体を精査することができなかった。

しかしながら、全体的には弥生時代・古墳時代の文化層は把握することができ、平安から中・近世にかけても部分的に残されている個所もあった。本稿では、弥生時代・古墳時代・中・近世に分けて説明を加えていく事とする。

なお、この他柱穴がいくつか検出されている。層位からは中世以降と判断されるが、所属時期を明確にできなかったために、その他の時代として別記することとした。

遺跡全体 縦穴住居址2 土坑11 遺物集中地点6 柱穴47

内訳 弥生時代 縦穴住居址1

古墳時代 縦穴住居址1 土坑3 遺物集中地点6

中・近世 土坑8

所属不明 柱穴47

時代	遺構	遺構略号	規模(長径×短径×深さ)	主要出土遺物等
弥生時代	2号縦穴住居址	S B 2	—×—×15	甕
古墳時代	1号縦穴住居址	S B 1	509×476×30	甕・坏
	7号土坑	S K 7	59×44×29	坏
	10号土坑	S K 10	235×135×25	
	11号土坑	S K 11	92×60×34	
	1号遺物集中地点	Loc. 1	460×390	手捏土器・須恵器甕
	2号遺物集中地点	Loc. 2	90×45	土師器甕
	3号遺物集中地点	Loc. 3	80×60	土師器片
	4号遺物集中地点	Loc. 4	70×40	土師器片
	5号遺物集中地点	Loc. 5	70×65	土師器片
中・近世	6号遺物集中地点	Loc. 6	75×50	土師器片
	1号土坑	S K 1	91×83×80	
	2号土坑	S K 2	125×112×—	
	3号土坑	S K 3	198×200×161	陶器碗
	4号土坑	S K 4	84×77×17	
	5号土坑	S K 5	91×94×8	曲物側板片
	6号土坑	S K 6	76×36×4	
	8号土坑	S K 8	81×52×41	
	9号土坑	S K 9	688×272×74	陶磁器・木製品

表2 発見された遺構一覧

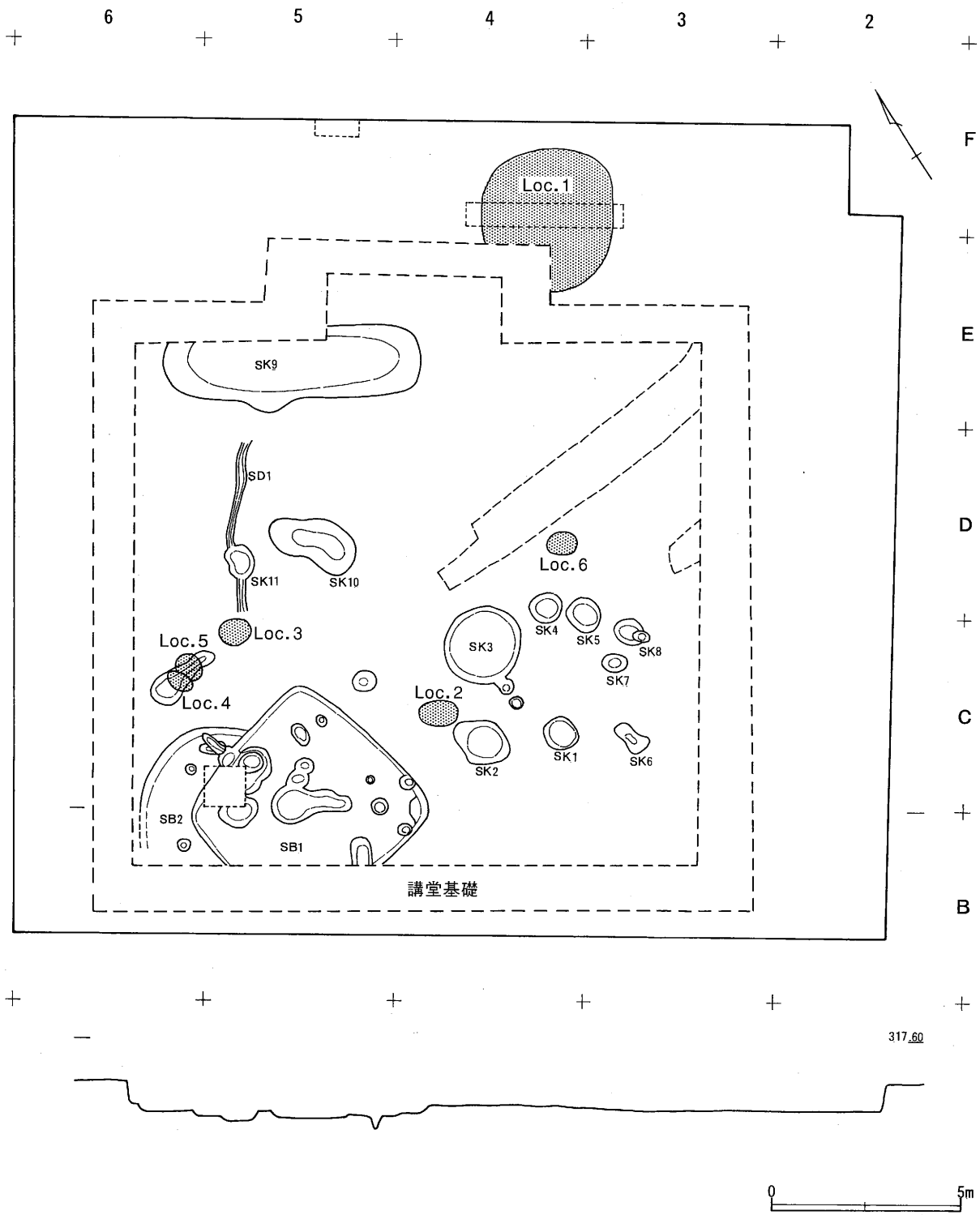


図 11 遺構分布図 (1:160)

第2節 弥生時代

1 遺構

2号竪穴住居址 (SB2) (図12)

弥生時代の遺構は1軒の竪穴住居址のみであったが、北町遺跡では初めての弥生時代遺構である。

B・C-5・6に位置し、古墳時代住居址に半分以上壊されている。推定径450cmの円形住居址と思われる。壁は確認面より15cmで、なだらかに床面に続く。壁の周囲に周溝は認められない。支柱穴は3本確認できているが、他は古墳時代住居址によって明確ではないが、おそらく5~6本、中央に土坑を有するものだろうと考えられる。この土坑は古墳時代住居址内のP1としたものだと考えられる。

遺物では、西壁際に完形の甕形土器が横に倒れた形で出土している。また、北側の壁には40×30cmの平石1点が斜めに置かれて出土している。

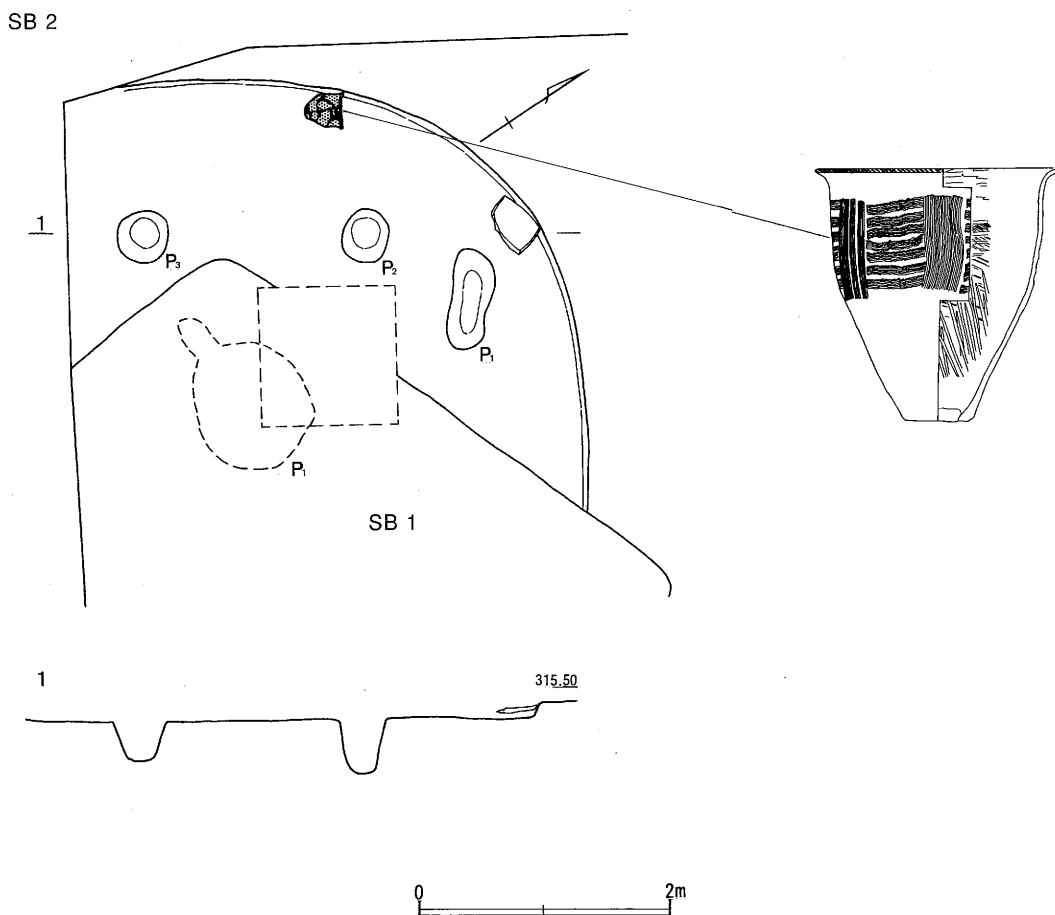


図12 弥生時代の竪穴住居址 (SB2) (1:60)

2 遺物

竪穴住居址より出土した遺物は、破片点数にして約50点。いずれも細片で摩滅しており、拓本にすることができなかった。図示し得たのは3点のみである（図13）。

甕（1・2）

1は完形の甕形土器である。大きく外反する口縁で、最大径を口唇部に持つ。口唇部には縄文が施文される。頸部以下は、1条7本一単位の櫛描波状文が7条めぐらされ、櫛描垂下文が6単位で施される。調整はナデのちミガキである。2は甕胴部で、櫛描直線文と横羽状文が施文されている。

壺（3）

細片の1点のみである。横走沈線文の間に縄文と山形沈線文、及び連弧文が施される。

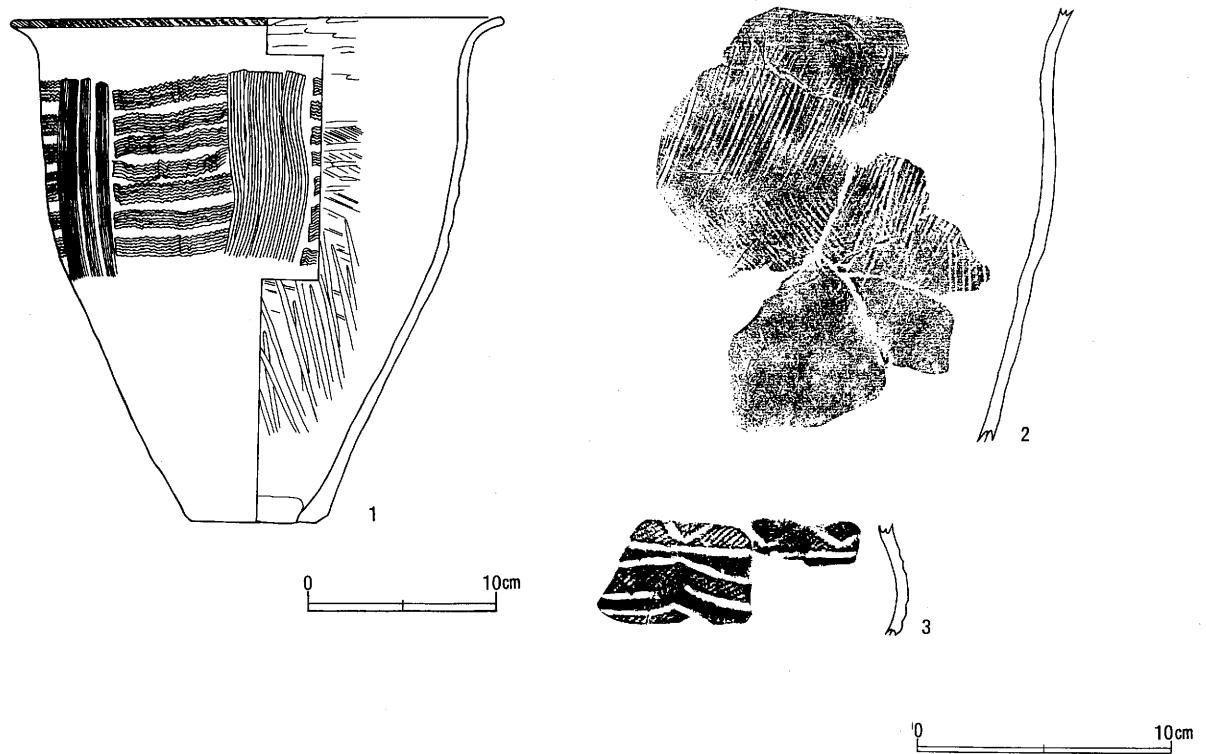


図13 弥生時代の遺物（1：4，1：3）

第3節 古墳時代

1 遺構

1号竪穴住居址 (SB1) (図14)

B・C-5に位置する。西南側は講堂基礎により破壊されている。500cm×480cmの方形プランを呈し、カマドは北壁の中央に構築され、煙道が約1m延びている。カマド構築材は破壊されていたが、カマド北側に散乱していた石が構築材であったものと思われる。壁は比較的急斜で、床面は張り床等は明確でなく軟弱である。これは水分の多い覆土のためかもしれない。主柱穴はP1からP3及び破壊された部分に1本あったとみなして4本柱と考えられる。ただし、P1はセクションには現れなかったが、弥生時代竪穴住居址の中央土坑と重複しているものと思われる。住居址中央の浅い土坑は、おそらく住居構築に伴うものであろう。

なお、覆土中には炭化物を多く含む層が認められ、骨片も混じっていた。

遺物集中地点 (Loc. 1~6) (図15)

調査区内において、遺構は認められなかったが遺物がまとまって出土していた個所が6地点存在した。3号集中地点~6号集中地点は、細片が約10点のまとまりで、特別の意味のあるような出土状態と認められないことから、地点のみ記入して遺物の取り上げを行った。また、2号遺物集中地点は1号竪穴住居址の東側に接して出土した。甕形土器等が密集して出土しており、ドットマップは作成することができなかったが、一括廃棄の場所とみなしえるような出土状態であった。

1号遺物集中地点は、E・F-3・4区に位置し、一部講堂の基礎によって破壊されている。総数約600点の出土で、手捏の小型土器の多いのが注意される。その他に土師器高坏や須恵器甕が出土している。破壊を受けていたことも影響しているのかもしれないが、完形となる遺物は小型土器以外認められなかった。

なお、遺物の出土レベルは、多少の高低差はあるが、精査したが遺構は確認できなかった。

土坑 (SK) (図16)

調査によって土坑は11基発見されたが、古墳時代の所属と考えられる土坑は以下の三基である。

7号土坑 (SK7) C-3区に位置する。周辺には中・近世の土坑がまとまっている。55×45cmの楕円形を呈し、深さは30cm、断面すり鉢状を呈する。

覆土中より土師器細片が出土していることから当該期とした。

10号土坑 (SK10) 1号竪穴住居址の北約3mに位置する。230×130cmの瓢箪形を呈する。底面西側に、土師器坏形土器がほぼ正位に置かれて出土していた。

11号土坑 (SK11) 10号土坑の西側に位置し、1号溝を切っている。90×70cmの楕円形を呈する。深さ35cmを測り、底面は平坦、断面は鍋底状である。

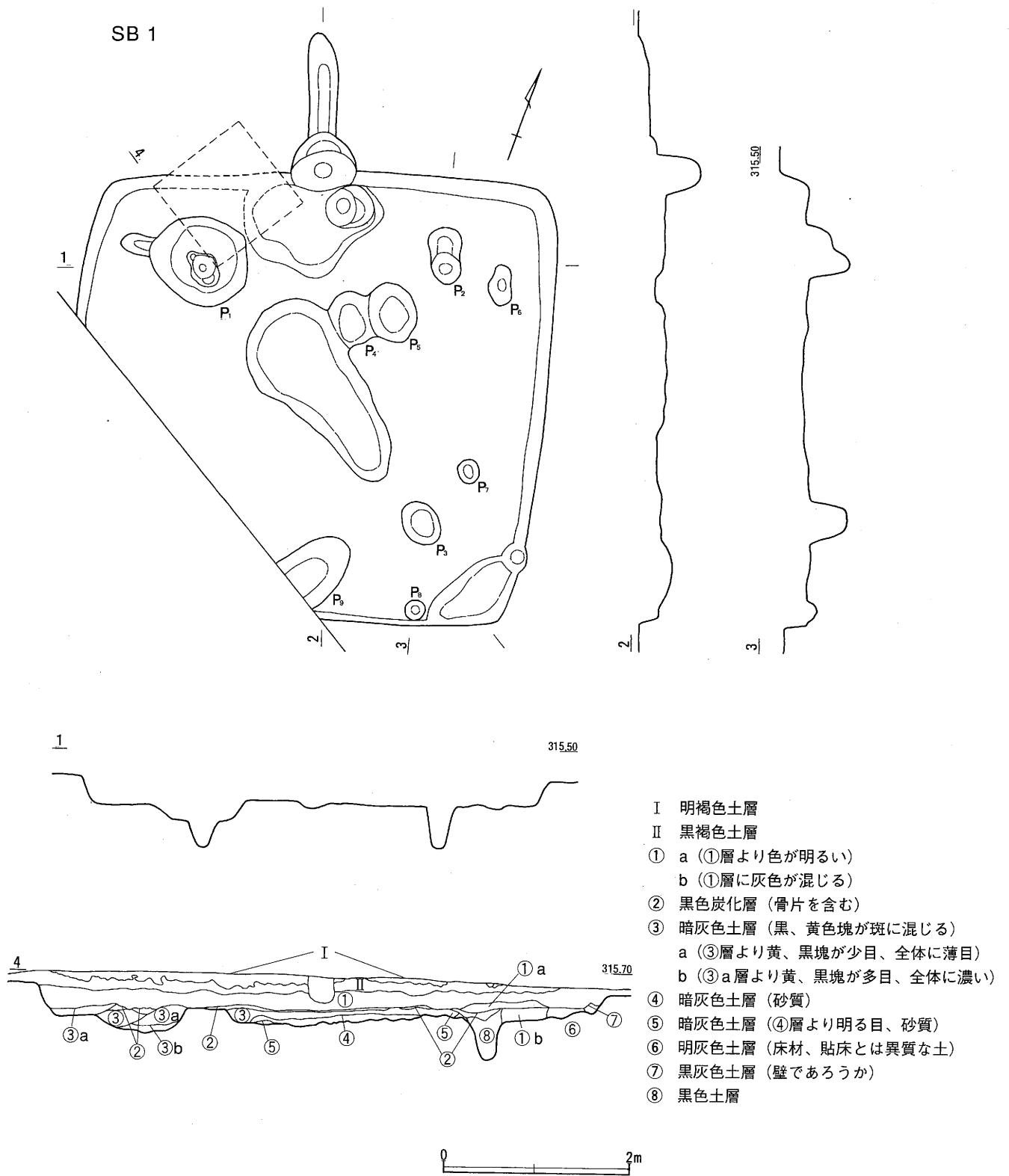


図 14 古墳時代の竪穴住居址 (SB1) (1:60)

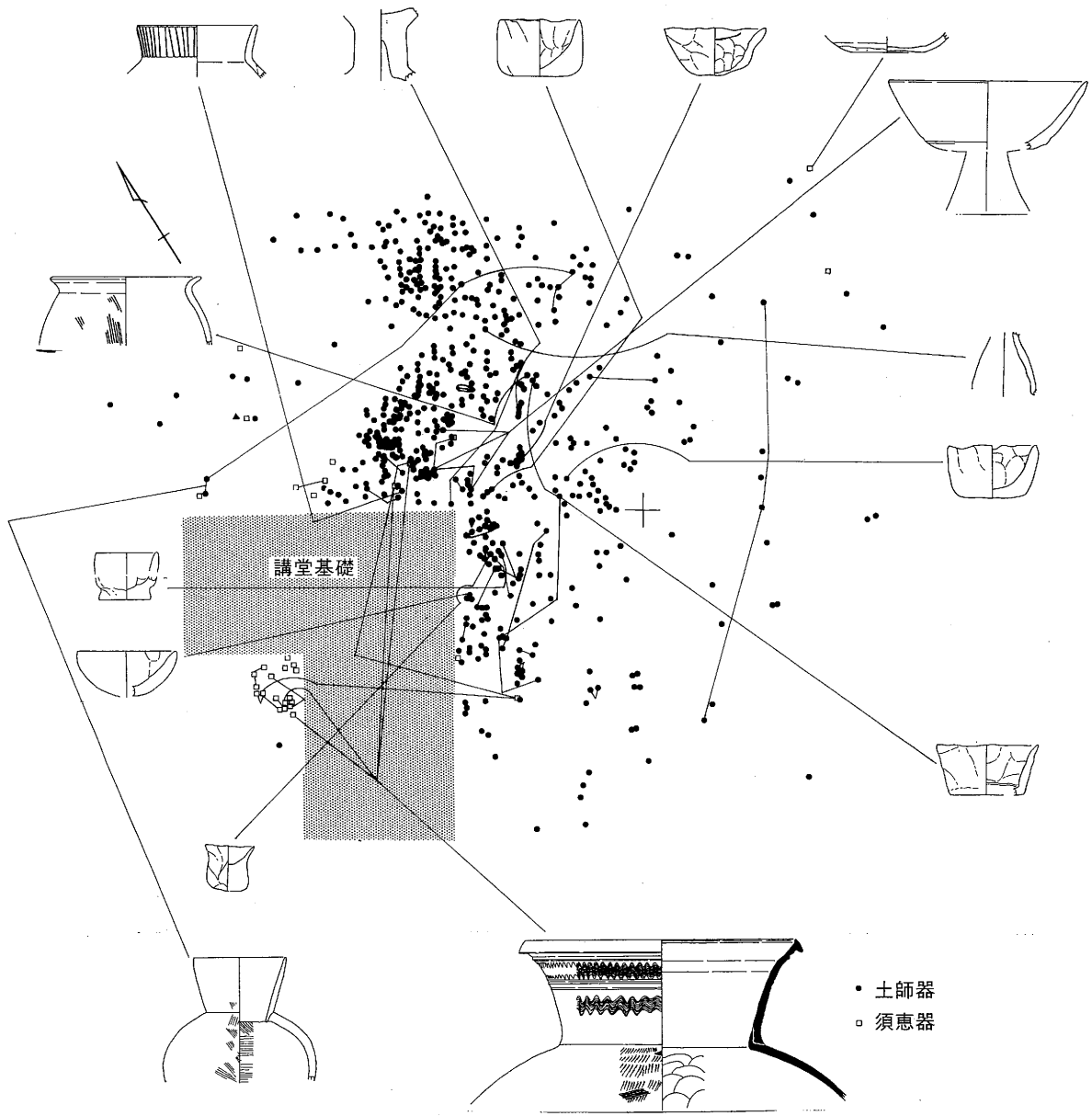
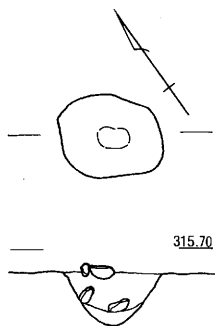


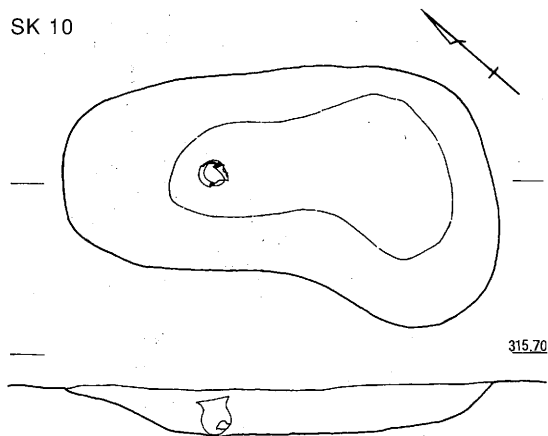
图 15 1号遺物集中地点分布图 (Loc. 1) (1:40)

SK 7

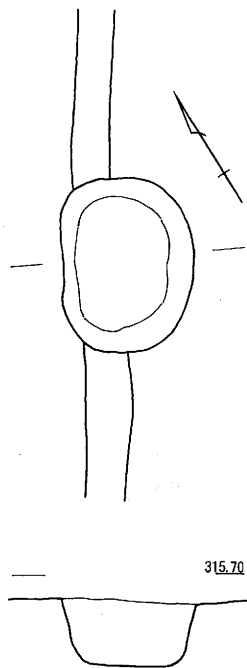


1. 灰色に白黄、黄、橙色が斑に混じる
2. 黒（暗）灰色土

SK 10



SK 11



1 黒褐色土

SD 10

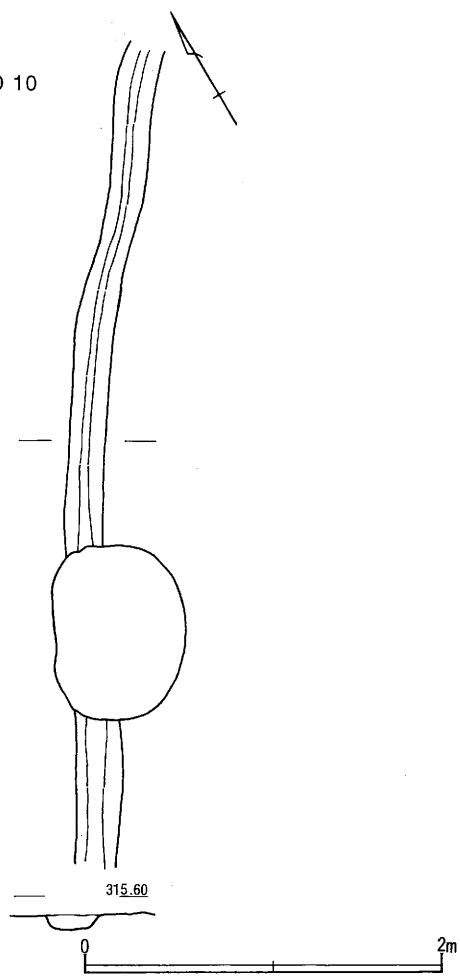


図 16 古墳時代の土坑・溝（SK・SD）（1：40）

2 遺物

1号竪穴住居址出土遺物 (図17-1~8)

図示し得たのは、甕2、坏4、甑1、石包丁1の計8点である。ただし、石包丁は、弥生時代住居址を一部破壊して構築していることから、本来は弥生時代2号住居址に所属するものであろう。

甕 (1. 2) 1は口縁端が強く外反する甕で、色調は赤褐色を呈す。胎土に小石を含む。口縁はナデ、胴部はハケ調整が施される。2は緩く外反する口縁で、色調は茶褐色、内面は黒色を呈する。胎土には小石を多く含み、焼成は悪い。

坏 (3~6) 3は屈曲の弱い坏で、器壁は薄い。胎土に小石を含み、色調は茶褐色。4は短く口縁が外反する。5は内面にミガキが加えられる。6は黒褐色を呈し、焼成は良好である。

甑 (7) 底部を欠くが、やや内湾気味に立ち上がり、口縁端がやや開く甑である。内外面ともハケ調整が行われる。

石包丁 (8) 打製の石包丁である。飯山地方には弥生時代中期に磨製の石包丁が使われているが、打製は比較的珍しい。遺構の項でも触れたが、弥生時代中期の竪穴住居址を切って本住居址が構築されているので、その時に紛れたものであろう。セクションベルト内からの出土である。

横長の剥片を用い、石核より作出された鋭い縁辺をそのまま刃部として用いている。基部側は正面及び裏面とも調整加工が行われ形態を整えている。裏面の一部に使用によって生じたと思われる摩滅痕が残される。

10号土坑出土遺物 (図17-9)

1点のみ抗底に正位に置かれた状態で出土したもので、土師器の坏である。胎土に小石・砂粒を含み焼成は良好である。

1号遺物集中地点 (Loc.1) 出土遺物 (図17-10~図18)

本遺構からは、土師器坏1、小型丸底土器1、甕2、手捏土器7、高坏4、須恵器1をはじめ多くの遺物が出土した。本稿では図上復元の可能な15点に須恵器拓本5点を図示した。

土師器小型丸底土器 (図17-10) 直線的に開く口縁と球形に丸くなる胴部の形態をとる。摩滅が激しく全体の調整は不明瞭だが、表面はハケのちナデ、内面はハケ調整と思われる。胎土に小石を多く含み焼成は良好である。色調は赤褐色を呈す。

土師器甕 (図17-11.12) 11は直立気味に外反する口縁形態をとる。色調は茶褐色で、焼成は良く堅緻である。口縁には縦のミガキが施される。12は、短く「く」の字状に外反する口縁形態で、口縁部はナデ、胴部にはハケが施される。胎土は黄褐色で、胎土には小石が混じる。

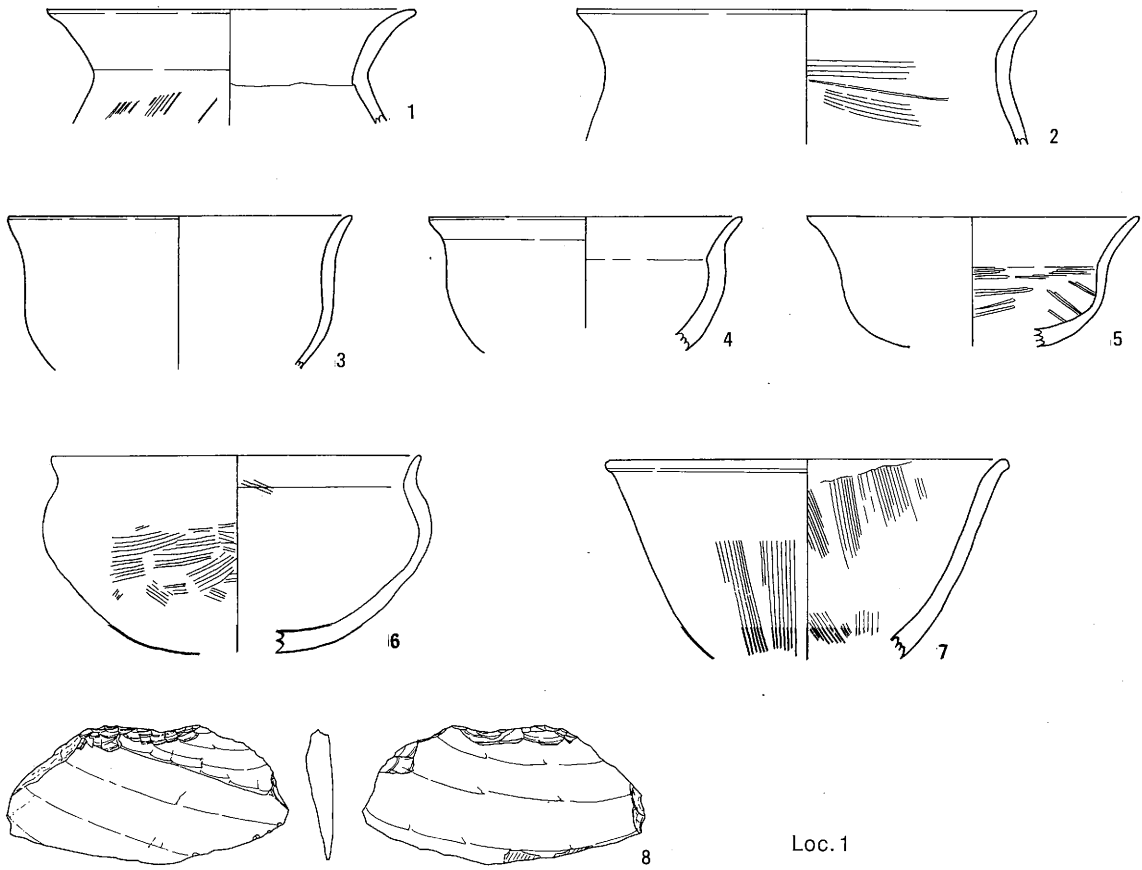
土師器手捏土器 (図17-13~19) 13~19はすべて小型の手捏土器であるが、形態的にはさまざまである。底部についてみれば、安定した13.15.16.17と安定しない14.18.19がある。いずれも手の押さえがわかる製作方法で、簡単に整形してあると思われるものは13と19のみである。

これだけいわゆる祭祀に関係するような遺物が集中的に出土することは、この地点がその場所であった可能性もある。

土師器高坏 (図18-1~4) 全形のわかる資料はないが、坏部1点と脚部3点の計4点が出土している。1は上外方にほぼ直線的に開く器形を呈し、脚部に接続する付近で稜を持つ。2~4は脚部で、2は直線的に開くもの、3は有段となり脚柱が中膨れとなる。4はやはり有段で、円筒状の脚柱を呈する。1~3は赤褐色を呈し、4は黄褐色で内面が黒色処理されている。

須恵器甕 (図18-5~10) 5~9は甕胴部破片である。5・6・9はいずれも外面に平行タタキを施し、のちにカキ目を加えている。10は大型甕の口縁部から胴部にいたる部分である。球胴胴部から「く」の字状に外反し、断面が三角形の口唇部を持つ。口縁部中央部には2本単位の凹線文が引かれ、その上下に櫛描波状文が施文される。胴部は平行タタキのちカキ目が施される。

SB 1



SK 10

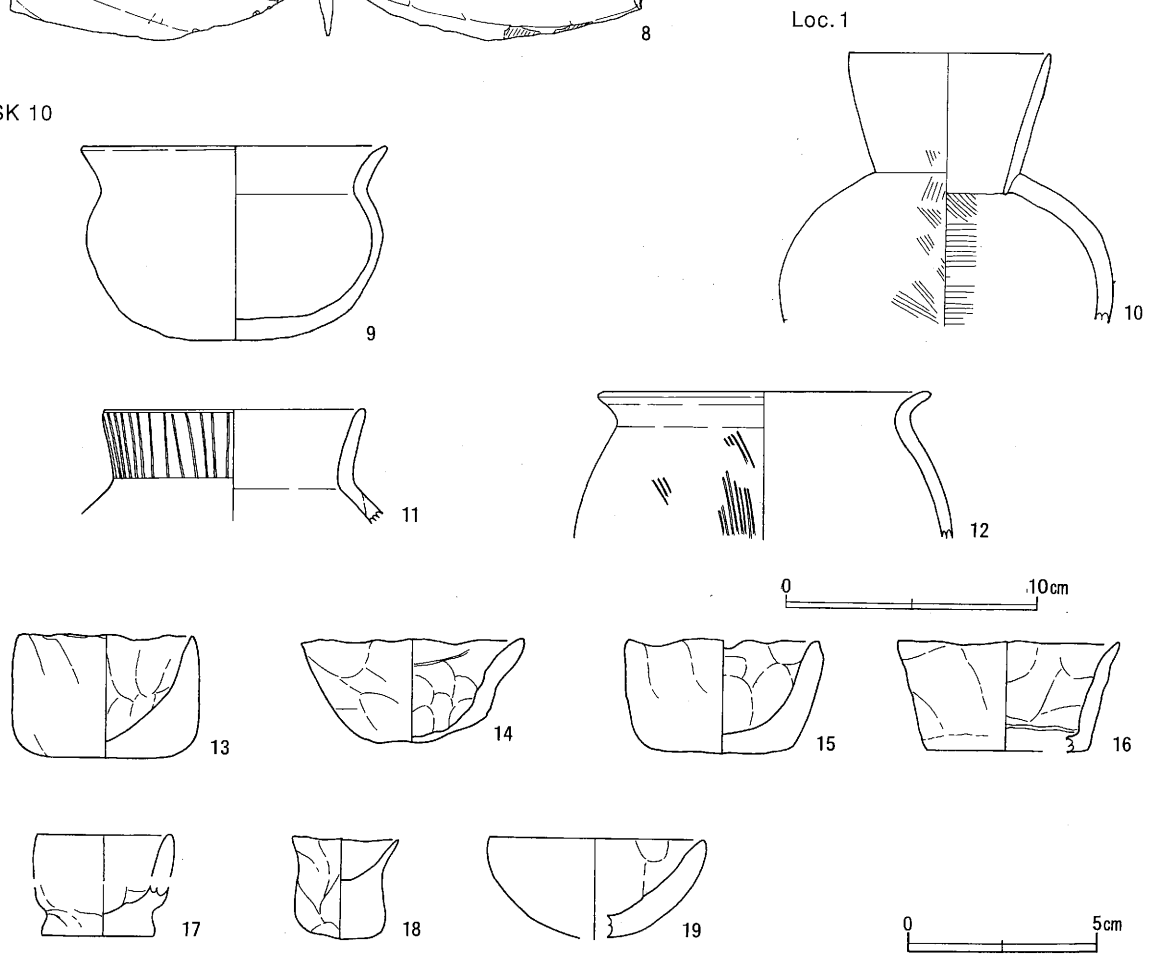
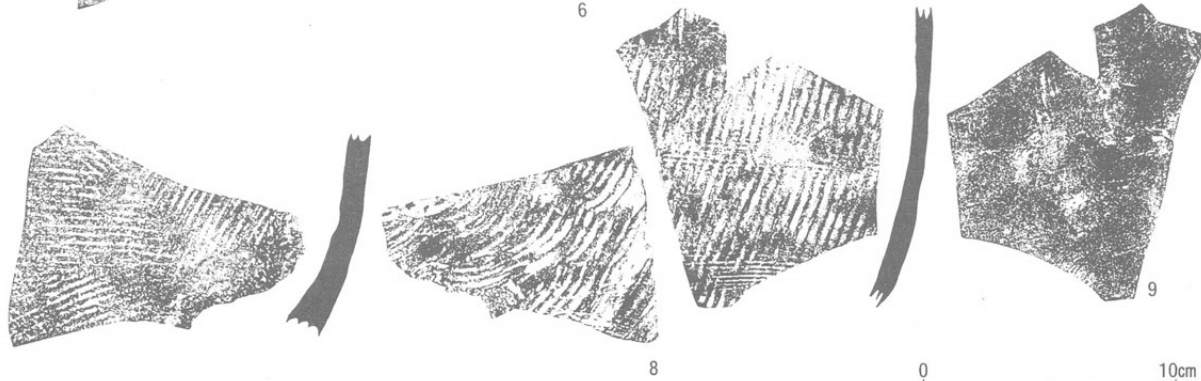
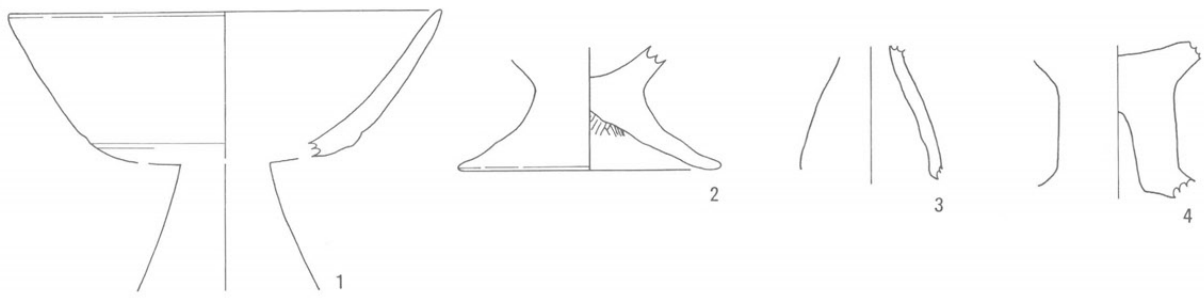


図 17 古墳時代の遺物 (1) (1:3. 1:2)



0 10cm

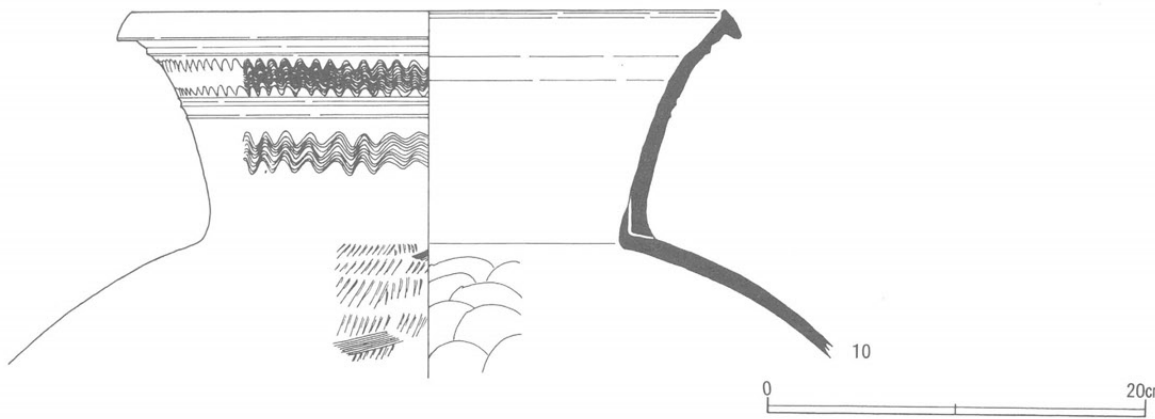


図 18 古墳時代の遺物 (2) (1:3. 1:4)

2号遺物集中地点 (Loc.2) 出土遺物 (図19-1~3)

土師器甕 (1~3) 2号遺物集中地点から出土した遺物はすべて土師器で、3点である。1は緩く外反する口縁で、胴部はやや球形を帯びる。口縁部はナデ調整がなされ、胴部は内外面ともヘラケズリ、外面はのちナデがなされる。胎土に白砂を含む。焼成は良好である。2・3は「く」の字状に外反する口縁で、焼成はともに良好で堅緻である。

土師器高坏 (4) 口縁形態は不明だが、大きく開くものと思われる。脚部も明確でないが短く開くものと思われる。

Loc.2

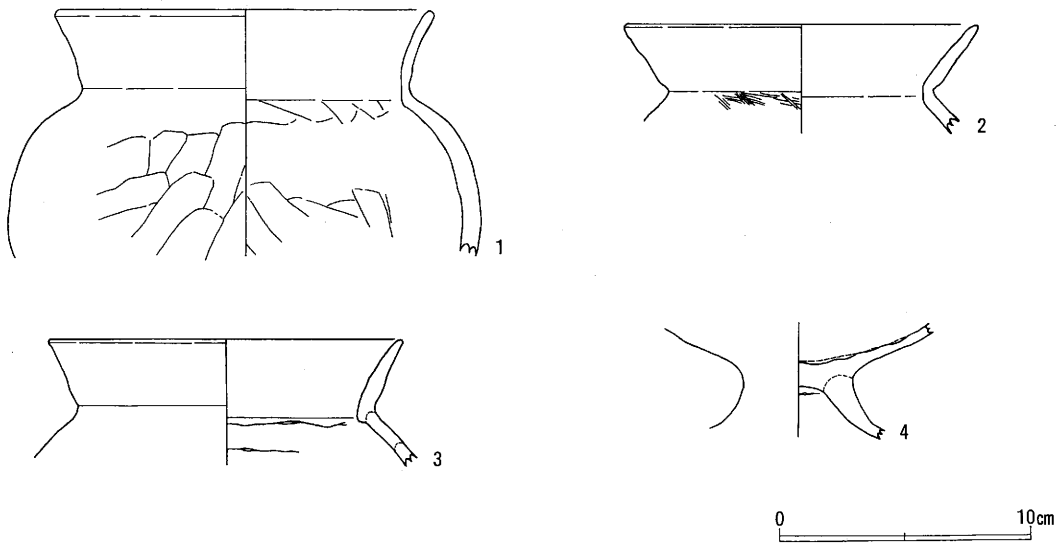


図19 古墳時代の遺物 (3) (1:3)

第4節 中・近世

1 遺構

中・近世に該当すると思われる遺構は、土坑8基である(図20・21)。近世には当該地は武家屋敷となっており、古絵図にも記載されている。その後、明治36年の飯山中学建設により、一帯が取り壊され、今回の調査区には明治39年に講堂が建てられることとなった。そのため、かなり地下深く造成が行われ、中・近世の包含層は大きく壊されることとなった。今回検出された遺構は、その造成に免れた下位の部分がわずかに検出されたと考えられる。以下に、遺構ごとに説明を加える。

1号土坑(SK1)

C-4区に位置する。90×80cmのほぼ円形を呈し、深さは80cmを測る。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。出土遺物はない。

2号土坑(SK2)

SK1の西1.5mに位置する。120×110cmの不定形なプランを呈する。深さは湧水が認められ、危険であったため底部まで確認できなかったが、70cmまで調査した。壁断面はすり鉢状となっている。陶磁器破片が出土。

3号土坑(SK3)

C-4区に位置する。径200cmの円形プランを呈し、深さ160cmで、ほぼ垂直に掘り込まれている。陶磁器破片が出土している。

以上の三基は、確認面からの深さが70cm以上あり、当初の掘り込まれた面から推定すれば150cm以上あったと推定でき、地下水位も高いことから井戸址と考えることができる。ただし、これらの三基はまとまっていること、井戸枠等の痕跡が認められないこともあり、明確に断定することはできない。

4号土坑(SK4)

SK3の東側に接している。平面は85×80cmで、ほぼ円形プランを呈する。深さは15cmと浅い。

5号土坑(SK5)

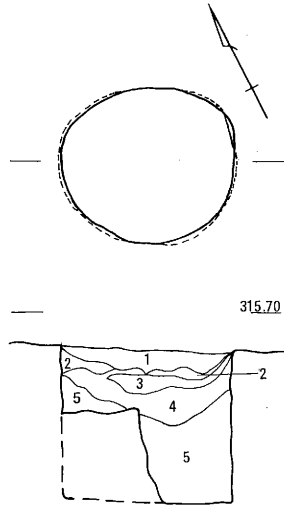
SK4の東側に接する。95×90cmのほぼ円形のプランを呈し、深さは10cmと浅い。壁の周囲の一部に木製曲物側板と思われるものが出土したが、遺存状態が悪く保存取り上げすることができなかった。

以上の4、5号土坑は、当初深さが1m位であること、曲物の一部が残されていたこと等を考えると厠跡と考えることもできよう。

6号土坑(SK6)

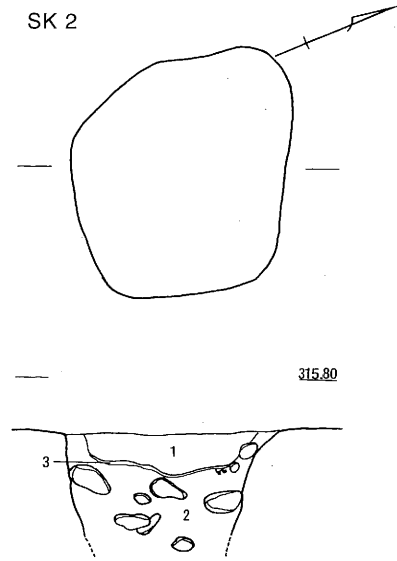
C-3区に位置し、70×30cmの不定形な形態である。深さは5cmである。

SK 1



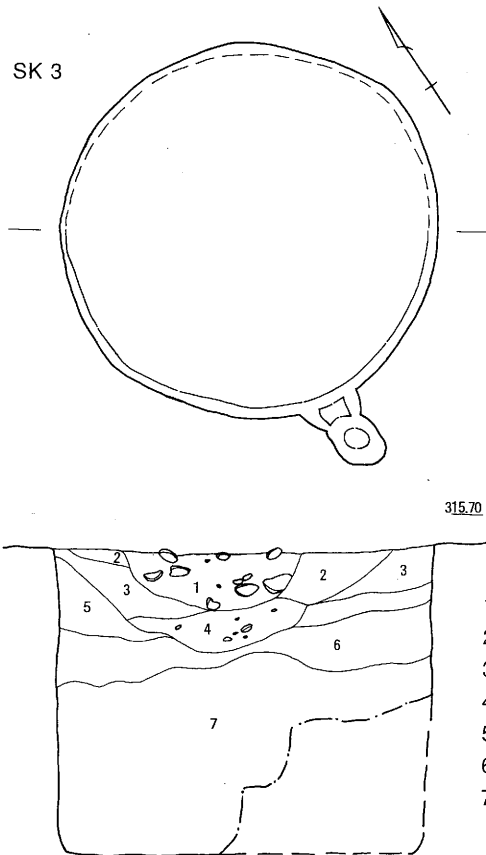
1. 白灰色土に暗灰色を含む
2. 白灰色土に橙色塊が多目に混じる
3. 黒灰色土
4. 黒灰色土に黒、白灰、黄橙色土塊が混じる
5. 4より全体に色調が暗い

SK 2



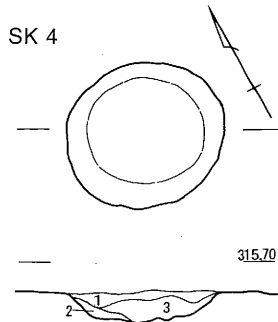
1. 黄橙色に白灰色塊が混じる
2. 黒灰土 砂質
3. 炭化層

SK 3



1. 灰色に橙色粒を含む 砂質 河原石 (~20cm) を多数含有する
2. 灰色に橙色粒 (1より大きめ)、白灰色と黒色塊が斑に混じる 砂質
3. 2層に黄色、白灰色塊が多目に混じる 砂質
4. 灰色土 石が (~10cm) 1層より少目に含有する
5. 3層より黒色塊が多目
6. 5層に橙色粒を含む
7. 灰色土 葦類の植物を含む

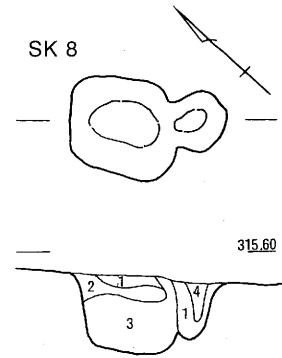
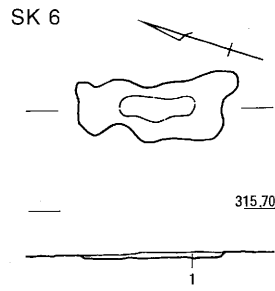
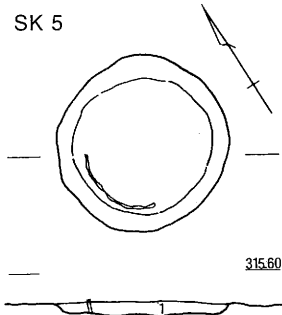
SK 4



1. 黒灰色に白灰色が斑に混じる
2. 1に黒色粒が含まれる
3. 1に黄橙色粒子が混じる



図 20 中・近世の遺構 (1) (1:40)



1. 黒（暗）灰色に白灰色に斑が混じる

1. 暗灰色に白灰色塊が含まれる

1. 暗灰色に白灰色、黒色塊が斑に混じる

2. 1に黄色が強目に含まれる

3. 1に黄色塊が少し混じる

4. 1に黄色塊が少し混じる

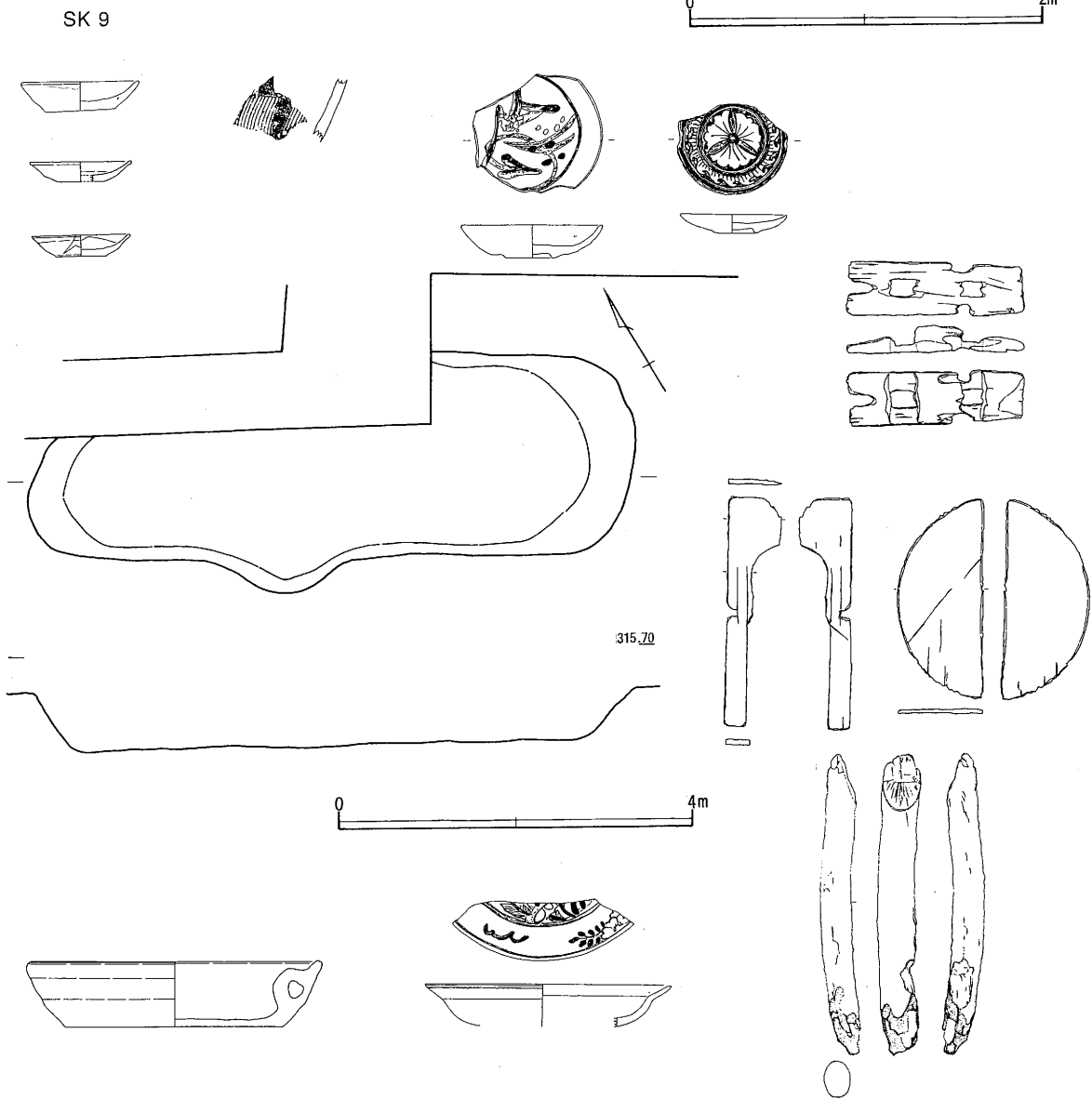


図 21 中・近世の遺構 (2) (1:40)

8号土坑 (SK 8)

C・D—3区に位置する。東側を時期不明のピットに切られる。径50cmの不正隅丸方形を呈し、深さは40cmを図る。

9号土坑 (SK 9)

E-4・5・6に位置し、北側を講堂の基礎によって破壊されている。350×120cmの隅丸長方形を呈し、深さは約40cm、壁断面は長軸が鍋底状、短軸側は比較的急斜で底面に接する。覆土中には、木屑ないしは藁状遺物の層や炭化層、焼土層などが認められた。また、遺物には明らかに火によって煤が付着したものもあり、土坑内で火を燃やした痕跡が伺えた。

遺物は、陶磁器や内耳土器などのほか木製品類も多く出土している。

2 遺物

発見された中・近世の遺物は、土器・陶磁器類、木製品である。以下遺構外出土土器もあわせ個別に説明を加える。

遺構外出土土器 (図 22 - 1 ~ 8)

陶器 (1・2・7・8) 1・2はいずれも肥前陶器である。1は碗で灰釉、蛇目釉ハギである。2は皿で緑色の灰釉、砂目土である。1は17世紀後半から18世紀か。2は17世紀初頭であろう。7及び8は、口縁内外面に鉄釉の施された山茶碗である。

磁器 (3~6) 肥前磁器の染付けである。3・4は碗、5は皿で、6は草花文染付けの皿である。

3号土坑出土遺物 (図 22 - 9)

唯一の出土で、陶器碗である。内面と外面胴部まで濃緑色の釉薬がかけられる。陥入があり、胎土目である。

9号土坑出土遺物 (図 22 - 10 ~ 図 23)

土器 (図 22 - 10・11、図 23 - 1~6) 11は完形の灯明皿で、口唇部にはタール状の有機物とともに煤が付着している。底面には糸切り痕をとどめる。図 23 - 6は内耳鍋である。土坑内から散在して発見されたがほぼ完形となった。茶褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。表面には煤が付着している。内耳土器は時代が新しくなるに従い器高が低くなる傾向とされるが、本例はそのもっとも新しい段階のもと思われる。

陶器 (図 22 - 12~16) 12は山茶碗で、口唇部ない外面に鉄釉が掛けられる。14・15は肥前のすり鉢である。16は珠洲陶器の片口鉢で、卸目は11本まで数えられる。

磁器 (図 22 - 17~図 23 - 5) 図 22 - 17~図 23 - 4は肥前染付けで、皿 (17~19・1・3) と碗 (2・4) がある。いずれも草花文、竹文などが描かれる。19と1は群青色、他は青色の染付けである。5は青磁の碗である。18は17世紀代のものと考えられる。

木製品 (図 24) 木製品には、下駄 (1)、杓子 (2・3)、曲物 (4~6)、板状製品 (7~10)、棒状製品 (11) がある。下駄は、全長 20.2cm、中央部幅 6cm、台部厚さ 3cm を測る。差歯下駄で、歯は発見されていない。2及び3はU字状のえぐりが入った幅広の杓子である。4・5は曲物の蓋 (4) と底板 (5) である。4には斜めに孔が1個認められる。5は6mmの薄い板で、漆状のものが塗られている。6も底板であろうか。7~10は具体的な製品名は断定できない。おそらく箱形容器か曲物の底板であろうか。11は、表皮を残す棒状のもので、先端部は斜めに切断されている。基部側は加工があるように見えるが、燃えて炭化しているためにはっきりしない。

以上、出土遺物のうち陶磁器については山茶碗を除き、1点のみ珠洲陶器片であったが、他は肥前陶磁であった。年代的にはバラツキがあるが、珠洲系陶器や内耳土器等16世紀にまで遡るものと思われる。

遺構外

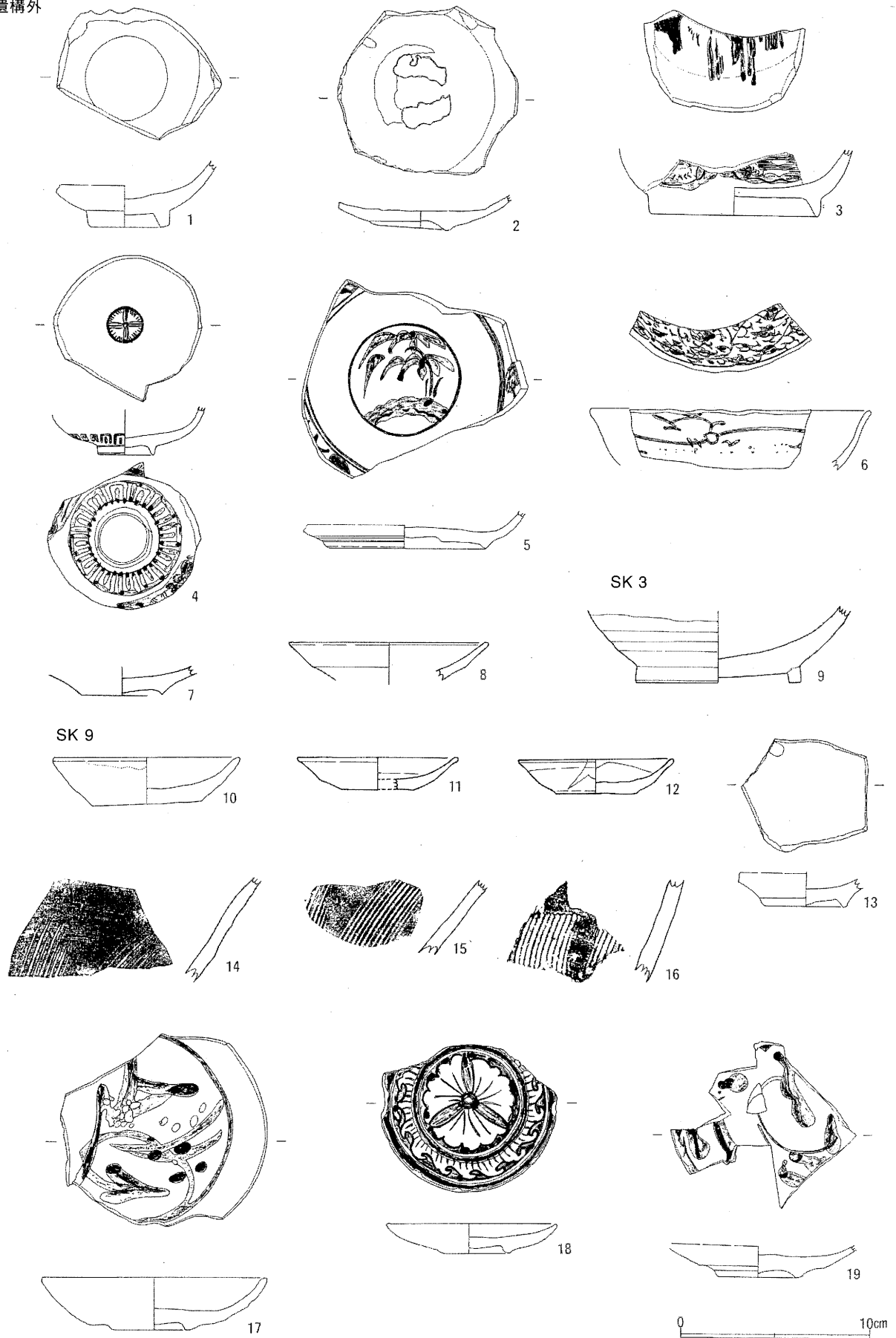


図 22 中・近世の遺物 (1) (1:3)

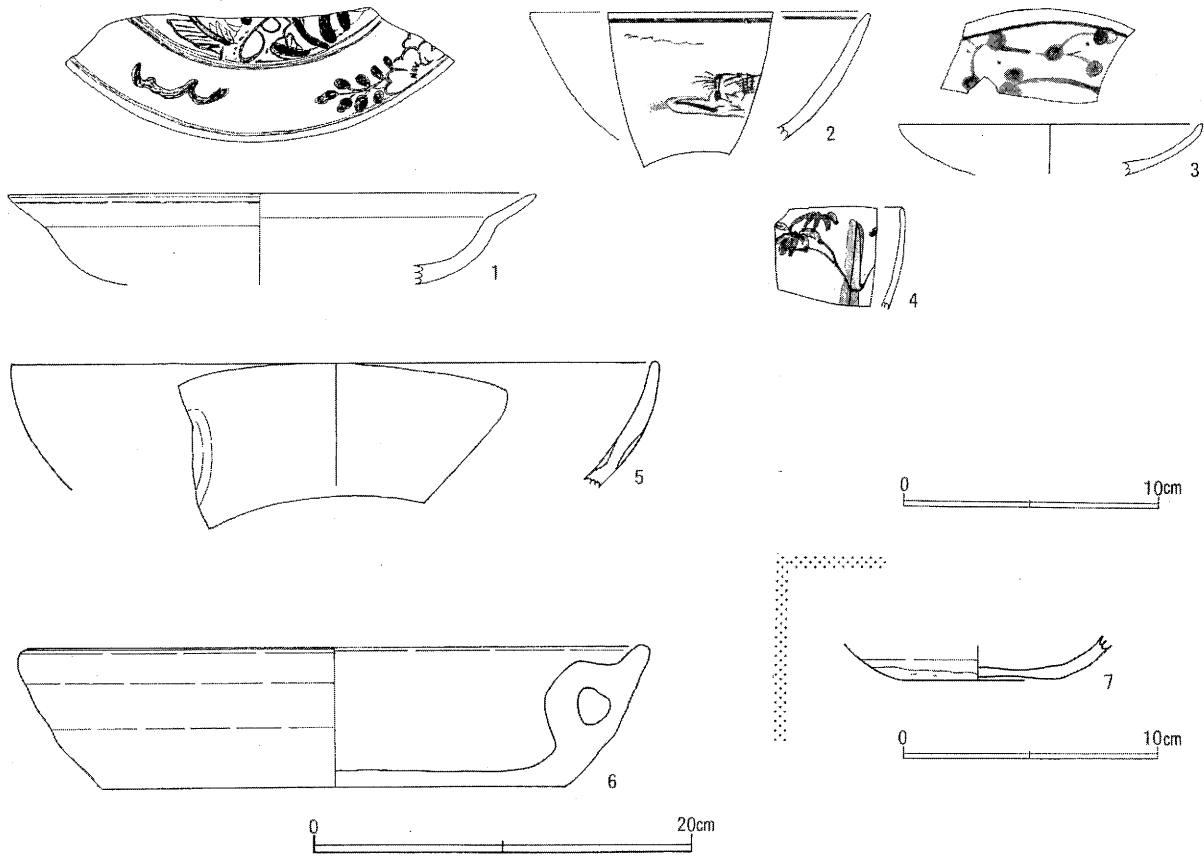


図 23 中・近世の遺物 (2) (1:3, 1:4)

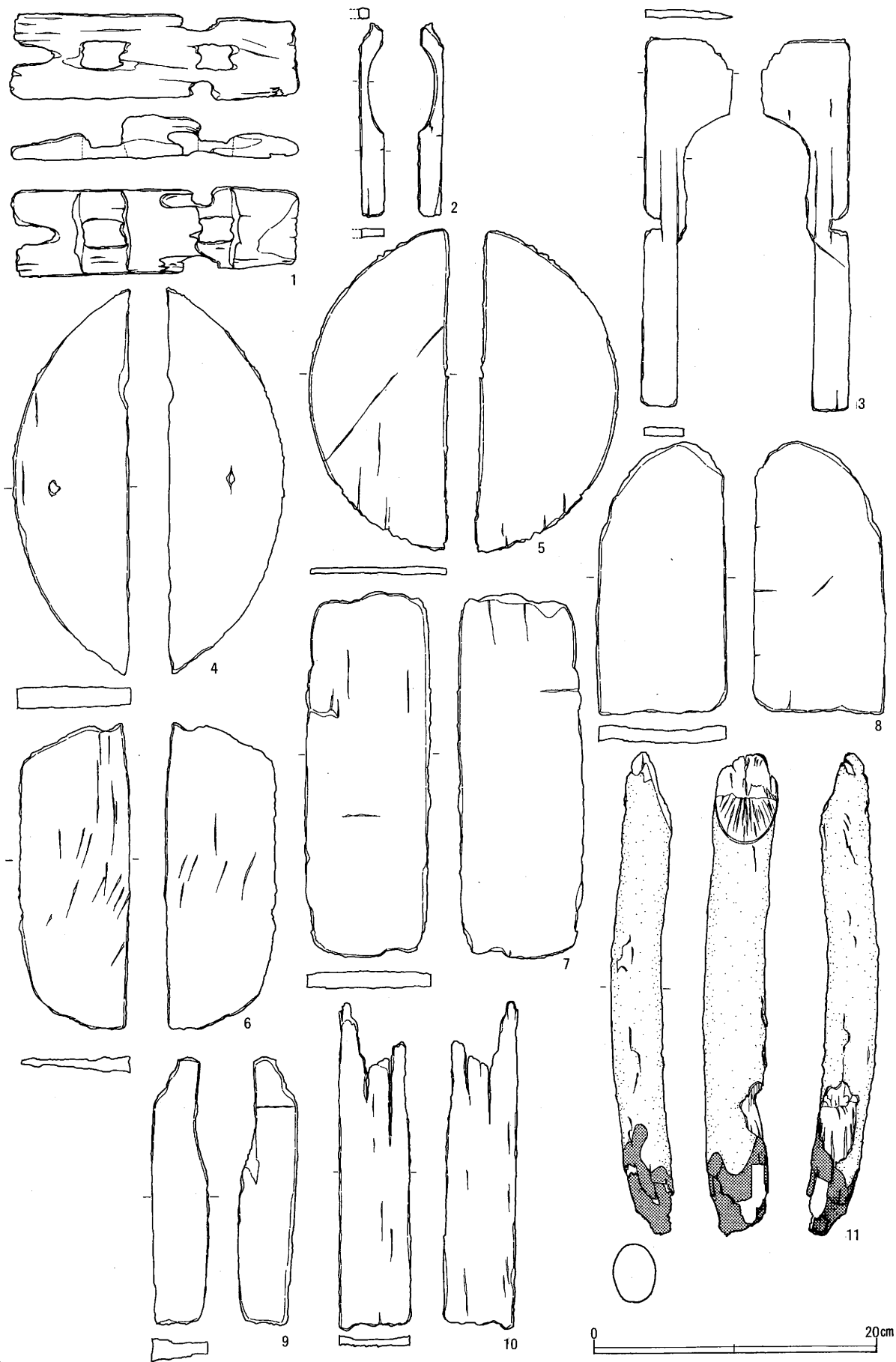


図24 中・近世の遺物 (3) (1:4)

33	C-5	17×13×21	楕円形	
34	C-5	9×9×7	円形	
35	C-6	22×22×54	円形	近・現代か
36	C-6	10×7×—	楕円形	近・現代か
37	C-5	18×13×—	長方形	近・現代か
38	C-5	20×20×21	正方形	近・現代か
39	C-5	22×20×—	正方形	
40	C-4	23×17×—	長方形	近・現代か
41	C-6	15×14×8	円形	近・現代か
42	C-5	25×17×—	長方形	
43	C-5	17×14×—	長方形	
44	C-5	11×11×—	円形	近・現代か
45	B・C-5	22×20×11	円形	近・現代か
46	B-5	13×13×5	正方形	
47	B-5	16×15×—	正方形	

表3 ピット計測一覧表

2 遺物

1点のみであるが、平安時代の須恵器坏が出土している（図23-7）。底部及びその周辺には回転ヘラケズリ調整が行われている。古墳時代1号遺物集中地点の端部より出土したものであるが、調整方法から、平安時代前期の須恵器と思われる。

図版実測 図番号	種類	器種	口径	器高	底径	調整・文様等	出土遺構
13-1	弥生土器	甕	25.9	27.0	6.5	ハケテ [〃] ・ミカキ	SB2
13-2	弥生土器	甕	—	—	—	ナテ [〃] ・ハケ	SB2
13-3	弥生土器	甕	—	—	—		SB2
17-1	土師器	甕	14.5	—	—	ハケ・ナテ [〃]	SB1
17-2	土師器	甕	18.3	—	—		SB1
17-3	土師器	坏	13.5	5.6	—		SB1
17-4	土師器	坏	12.5	5.3	—	ナテ [〃]	SB1
17-5	土師器	坏	13.0	5.2	—	ミカキ	SB1
17-6	土師器	坏	14.5	7.8	—	ハケのちナテ [〃]	SB1
17-7	土師器	甗	15.9	7.8	—	ハケ・ナテ [〃]	SB1
17-8	石器	石包丁	—	—	—		SB1
17-9	土師器	坏	12.1	7.7	—	ナテ [〃]	SK10
17-10	土師器	壺	8.0	—	—		Loc.1
17-11	土師器	甕	10.5	—	—	ミカキ	Loc.1
17-12	土師器	甕	13.0	—	—		Loc.1
17-13	土師器	小型土器	4.8	3.3	3.5		Loc.1 手捏土器
17-14	土師器	小型土器	5.5	2.8	1.9		Loc.1 手捏土器
17-15	土師器	小型土器	5.3	2.9	3.2		Loc.1 手捏土器
17-16	土師器	小型土器	5.9	2.9	4.3		Loc.1 手捏土器

17-17	土師器	小型土器	3.7	2.7	3.0		Loc.1 手捏土器
17-18	土師器	小型土器	2.7	2.6	—		Loc.1 手捏土器
17-19	土師器	小型土器	5.8	2.6	8.0		Loc.1 手捏土器
18-1	土師器	高坏	12.2	12.0	7.1		Loc.1
18-2	土師器	高坏	—	—	—		Loc.1
18-3	土師器	高坏	—	—	—		Loc.1
18-4	土師器	高坏	—	—	—		Loc.1
18-5	須恵器	甕	—	—	—	タタ	Loc.1
18-6	須恵器	甕	—	—	—	タタ	Loc.1
18-7	須恵器	甕	—	—	—	タタ	Loc.1
18-8	須恵器	甕	—	—	—	タタ	Loc.1
18-9	須恵器	甕	—	—	—	タタ	Loc.1
18-10	須恵器	甕	31.9	—	—	タタ・ハ	Loc.1
19-1	土師器	甕	14.9	—	—	ケス ^リ ・ナ ^テ	Loc.2
19-2	土師器	甕	14.1	—	—	ナ ^テ ・ハ	Loc.2
19-3	土師器	甕	14.2	—	—	ナ ^テ	Loc.2
19-4	土師器	高坏	—	—	—		Loc.6
22-1	陶器	碗	—	—	3.4		遺構外
22-2	陶器	皿	—	—	4.8		遺構外
22-3	磁器	碗	12.4	4.0	8.9	染付	遺構外
22-4	磁器	碗	—	—	3.0	染付	遺構外
22-5	磁器	皿	—	—	8.5	笹文	遺構外
22-6	磁器	皿	15.0	—	—	草花文	遺構外
22-7	陶器	山茶碗	—	—	4.3	無釉	遺構外
22-8	陶器	山茶碗	10.7	3.3	—	口縁鉄釉	遺構外
22-9	陶器	鉢	13.5	4.0	8.9	胎土目・嵌入	SK3
22-10	土師質土	灯明皿	9.9	2.5	6.0	煤付着	SK9
22-11	器	灯明皿	8.5	1.7	4.0		SK9
22-12	土師質土		7.9	1.9	4.3		SK9
22-13	器		—	—	4.3		SK9
22-14	陶器	搦鉢	—	—	—	肥前(唐津)	SK9
22-15	陶器	搦鉢	—	—	—	肥前(唐津)	SK9
22-16	陶器	片口鉢	—	—	—	珠洲	SK9
22-17	陶器	皿	12.0	2.8	4.2	染付	SK9
22-18	陶器	皿	9.1	1.6	3.6	染付	SK9
22-19	磁器	皿	9.8	1.6	4.6	染付	SK9
23-1	磁器	皿	20.7	3.5	—	草花文染付	SK9
23-2	磁器	碗	13.5	—	—	緑釉	SK9
23-3	磁器	皿	12.1	2.0	—	染付	SK9
23-4	磁器	碗	—	—	—	笹文染付	SK9
23-5	磁器	皿	25.7	—	—	青磁	SK9
23-6	磁器	内耳鍋	32.9	7.6	24.8		SK9

表4 土器・陶磁器観察表

第5節 その他の時代

1 遺構

表土除去後の精査で検出されたピット群で、概ね中・近世以降、近・現代のものも含むと考えられる。(図25・表3)

ピット番号	グリット	長径×短径×深さ cm	形 態	備 考
1	E-6	14×11×7	円 形	
2	D・E-6	37×33×12	円 形	
3	D-6	10×10×13	円 形	
4	D-6	20×19×18	円 形	近・現代か
5	D-5	56×42×19	円 形	
6	D-6	15×15×13	正 方 形	
7	D-6	42×36×17	楕 円 形	近・現代か
8	D-5	29×24×18	長 方 形	
9	D-5	12×10×22	正 方 形	
10	D-5	12×9×6	楕 円 形	
11	D-5	16×11×14	長 方 形	
12	C-5	12×12×—	円 形	
13	C-5	35×22×—	不 整 形	
14	D-5	21×15×—	楕 円 形	近・現代か
15	C-6	28×23×25	楕 円 形	
16	C-6	29×30×26	正 方 形	
17	C-5	16×16×—	円 形	
18	C-5	37×36×—	円 形	
19	C-5	22×14×—	不 整 形	近・現代か
20	C-6	28×20×41	楕 円 形	
21	C-5	22×23×32	正 方 形	
22	C-5	10×10×—	円 形	
23	C-5	30×27×12	不 整 形	近・現代か
24	C-5	21×16×27	楕 円 形	近・現代か
25	C-5	13×10×—	長 方 形	
26	C-4	34×20×—	長 方 形	近・現代か
27	C-5	18×17×10	円 形	近・現代か
28	C-5	14×10×54	長 方 形	近・現代か
29	C-5	20×17×6	長 方 形	近・現代か
30	C-5	14×13×5	正 方 形	近・現代か
31	C-5	21×17×4	長 方 形	
32	C-5	15×16×8	正 方 形	

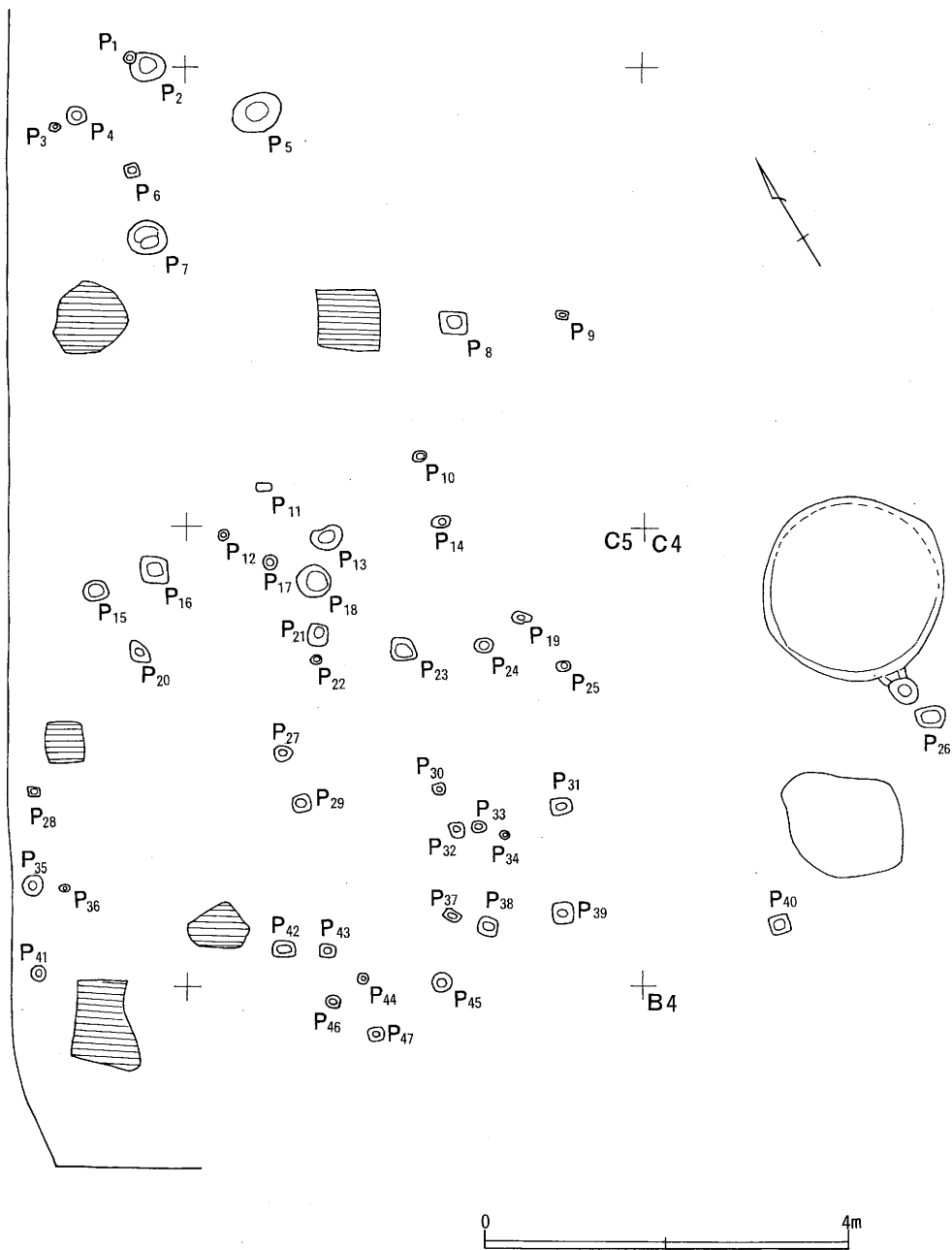


図25 ピット群分布図 (1:40)

第6節 遺構・遺物課題

1 弥生時代

今回の調査で、北町遺跡では初めての住居址を検出することができた。従来施設建設などで断片的に弥生時代中期や近世の遺物が発見されていたが、遺跡の性格としては「包蔵地」の範囲を超える情報を得ることはできなかった。その意味で、今回弥生時代・古墳時代それぞれの住居址を各1軒検出しえたことは、北町遺跡が当該時期の集落跡であったと明確に位置付けることができたといえよう。もっとも、面積的な関係もあり各時期1軒のみの検出で集落をなしていたとするには早計過ぎるきらいもあるが、少なくとも低湿地の生産地ではなく、弥生時代には集落を構えられるような微高地であったと考えることができる。集落の範囲や生産地については、今後さらに究明していきたい。

弥生時代の竪穴住居は、古墳時代の住居址により多くが破壊され、一部しか確認することができなかった。しかし、ほぼ円形で周溝は認められないなど、大まかに住居の形態などは把握することができた。

飯山地方のこれまでの発掘成果からすれば、弥生時代中期の住居址はすべて円形プランであり、今回も出土土器から中期の住居址と断定でき、矛盾しない。ただし、周溝の認められない円形住居址はほとんど例がない。飯山地方の弥生時代住居の変遷は、周溝を持つ円形プランから、周溝を持たない小判形もしくは楕円形のやや大型の住居、さらに隅丸長方形、(隅丸) 方形の順に変遷していく過程が見られる(飯山市教委 1995)。こうした変遷の中に周溝を含まない円形住居が時期差として存在してくるのか、この点についても今後の課題となろう。

遺物では、住居址出土のわずか1点の甕形土器が形態のわかるものである。文様の特徴から中期栗林式土器である。単純口縁の口縁部に縄文が施文され、無文部をはさみ胴部に廉状文と櫛描波状文が施文される様相は、栗林式土器の中でもあまり新しくはならない時期に置かれるだろうと思われる。

2 古墳時代

古墳時代の遺構では、竪穴住居址1軒、土坑3基、遺物集中地点6箇所がある。このうち竪穴住居址はカマドをもっており、飯山地方では古墳時代中期以降、関東の鬼高期になって造られるものである。規模も径5m前後の方形住居址で、この時期の規模とすれば一般的な住居といえる。ただし、地下水位が高く、土壌も粘質という発掘には悪条件が重なったため、構造等詳細に把握できなかったことが悔やまれる。

土坑では、10号土坑が注目される。形態は不定形であったが、底面より1点の土師器坏が置かれたように出土したことは、特別な施設であったように考えられる。赤彩の可能性も認められることから、祭祀的な遺構の可能性を考えたい。

また、遺物集中地点のうち1号地点は、一部講堂の基礎が入り破壊されていたが、手捏土器が多量に含まれており、やはり祭祀的な場所であった可能性が高い。

これらの遺構から出土した遺物は、土師器甕、坏、高坏、小型丸底土器、須恵器などであった。各遺構出土の古墳時代の遺物は、全体としてほぼ同時期のものとして捉えることができ、1号遺物集中地点の須恵器が陶邑TK47様式に類似する点や高坏の稜部が弱くなっている点、小型丸底土器の存在などを考慮すると6世紀代でも前半におかれるのではないかと推定される。

3 中・近世

中・近世の遺構は、その大半が破壊されておりわずかに残存しているに過ぎない。したがって、当時の様子を明らかにすることはできないが、断片的に当時の様子を明らかにできた。

検出された遺構は土坑のみで、井戸址や厠跡と推定される遺構である。近世末期の古絵図には(図26)侍屋敷が記載されており、わずかに発見された遺構からは推定することもできないが、絵図からすれば松田半蔵もしくは太田平左エ門の屋敷あたりと推定される。

また、9号土坑は井戸址を除き、一部中学校講堂基礎により破壊されていたが、他の遺構より明確に残されていた。出土遺物も中世にさかのぼるものがある。その施設用途については不明だが、中世戦国時代には飯山城は北が大手であったと推定されることから、付近はすでにメインストリートであったと考えられる。9号土坑はその状況からごみ穴の類と推定したが、中世もしくは近世初頭の遺構として今後の飯山史を考える上で重要となつてこよう。

遺物では、9号土坑から陶磁器類のほか木製品が多く出土した。これは地下水位が高かったために残されたものであるが、下駄などは飯山地方で初見である。これも当時の生活史を考える上で重要であろう。なお、陶磁器類については、肥前陶磁器が多いことが指摘される。肥前陶磁器の流通は、北信濃地方では北前船ルートで越後から流入しており、中・東信では富士川ルートが指摘されている(降矢 2001)。また、瀬戸・美濃流通ルートも南信から流通していることからすれば、飯山地方をはじめとする北信濃地方は、むしろ肥前陶磁器が主体をなす流通圏であったと考えることができる。ただし、近世中半以降瀬戸・美濃製品が市場で優位を占めるようになることから、近世前期までの状況といえる。

以上、簡単に課題を掲げた。北町遺跡については、その範囲をはじめ全貌を明らかにするには未だ多くの情報が不足している。今回の発掘調査を端緒として今後鋭意究明していきたい。

引用参考文献

飯山市教育委員会 「小泉弥生時代遺跡」 1995

降矢 哲男 「甲信地方における肥前陶磁の出土状況について」 - 第11回 九州近世陶磁学会資料
国内出土の肥前陶磁 所有 2001

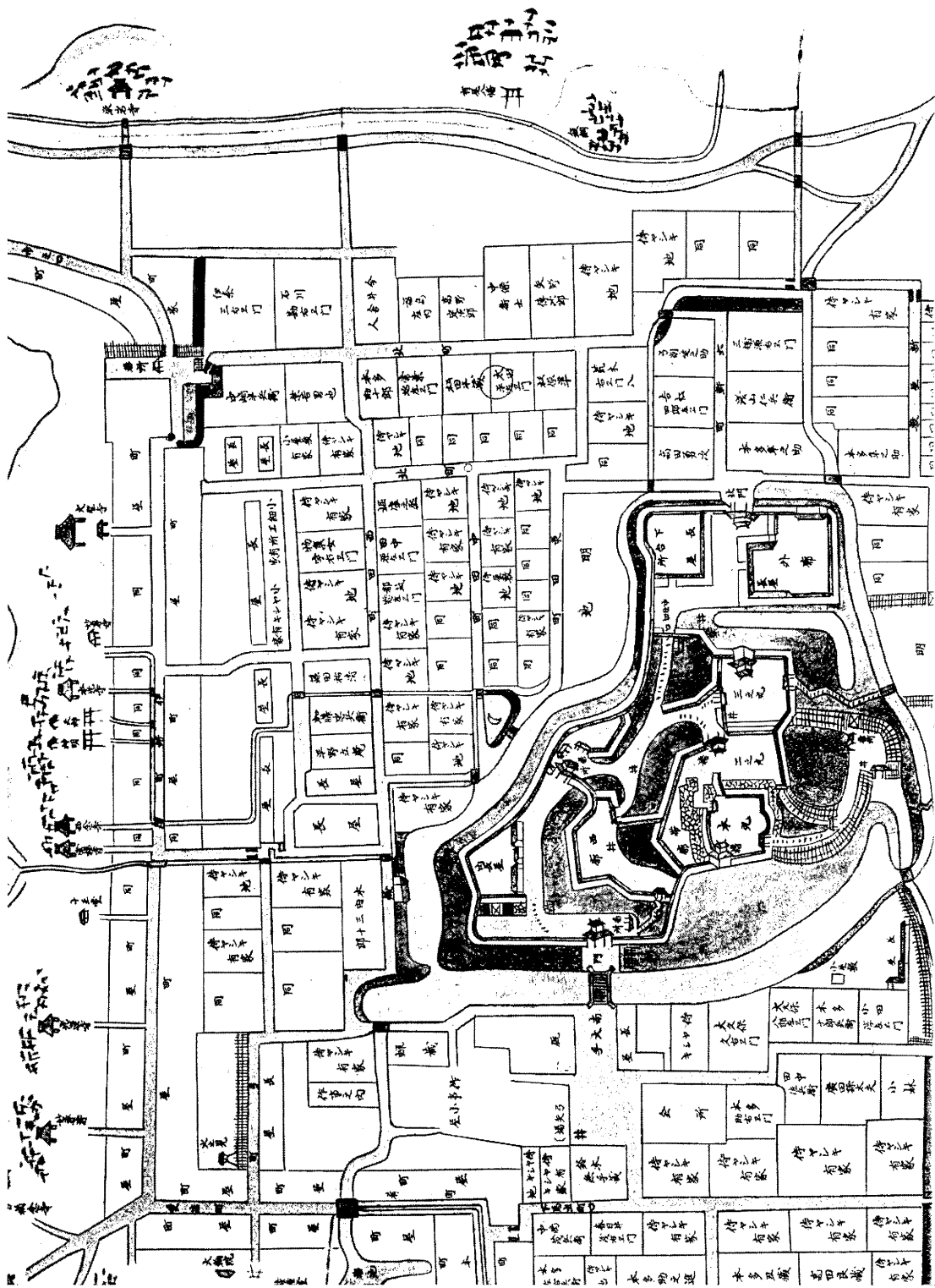


图 26 江戸時代後期の飯山城下絵図 (部分)

第IV章 ま と め

沼の池、湯入沢に源を有する皿川は、山地に深い峡谷を形成しつつ東流し、平地にいたる。平地に到達した皿川は、外様平の南端を蛇行しつつ流れ、飯山市街地の北端有尾地籍付近で千曲川に流入している。皿川が平地を流れるのは、わずかに2キロメートルほどであるが、この短い流域の台地上には、小佐原、須多ヶ峯、有尾といった県内でも著名な遺跡が存在する。(第1章第2節)。

今回調査した北町遺跡も、皿川が千曲川に流入する直前の右岸にあたる自然堤防上に存在する。対岸には、有尾遺跡がある。

長野県飯山北高等学校敷地内に、遺跡の存在が確認されたのは、いたって新しい。このことについては、第1章第1節で詳細に触れているので省略する。

今回の調査で、本遺跡が弥生時代・古墳時代・中世・近世にわたる複合遺跡であることが確認された。

以下、簡単に今回の調査について各時代ごとに触れてみよう。

弥生時代では、中期後半の住居址及び土器が発見された。そして、この飯山北高等学校敷地内には、他にも中期後半の住居址の存在が充分予測されることからみて、前面に広がる飯山市街地の北半を形成している北町、田町の低湿地を水田として利用した集落が、存在したと考えてよいであろう。北町、田町の低湿地帯には、飯山市街地西側の丘陵地帯より流下する小河川が2・3本ある。従って、今後この低湿地帯をめぐる、微高地の詳細分布調査を行う必要がある。このことは、弥生時代に止まらず、古墳時代・平安時代・中世・近世の研究にも必要であることは、いうまでもない。

古墳時代では、住居址、土坑、遺物集中地点などが発見された。土坑及び遺物集中地点では祭祀的性格を有するものがあり、古墳時代人の精神生活の一端を知る上で、重要な資料といえよう。年代的には、関東地方の鬼高期に併行する時代の所産と考えてよいであろう。対岸にあたる有尾地籍では、古墳時代の土器が各所で発見されている。このことは、有尾から北町の微高地にかけて、古墳時代の集落が形成されていたものと考えてよいであろう。そして、これらの集落を基盤として、有尾古墳や神明町裏山の古墳が造成されたものといえよう。

今回の調査で、特に注目されるのは近世の遺構、遺物の発見であろう。このことについては、「遺構、遺物」の項及び「遺構・遺物の課題」の項に詳細に記述されているので省略したい。ただ、今回の発見が飯山地域の近世史を考える上で、重要な示唆を我々にあたえてくれたとあってよいであろう。

それにしても、調査中は稀にみる悪天候であり、晴天はほとんどなく、雨と泥との戦いの連続であった。このような悪条件の中にあつて、作業員の皆さんはいやな顔一つされず、黙々と調査に従事された。心より感謝申し上げる次第である。最後に、今回の調査にあたり、深いご理解と種々と便宜を計って下さった飯山北高等学校当局に、深甚なる謝意を表する次第である。

PLATE



調査区近景



調査風景



調査区全体（南から）



調査区全体（西から）



古墳時代1号竪穴住居址 (SB1)



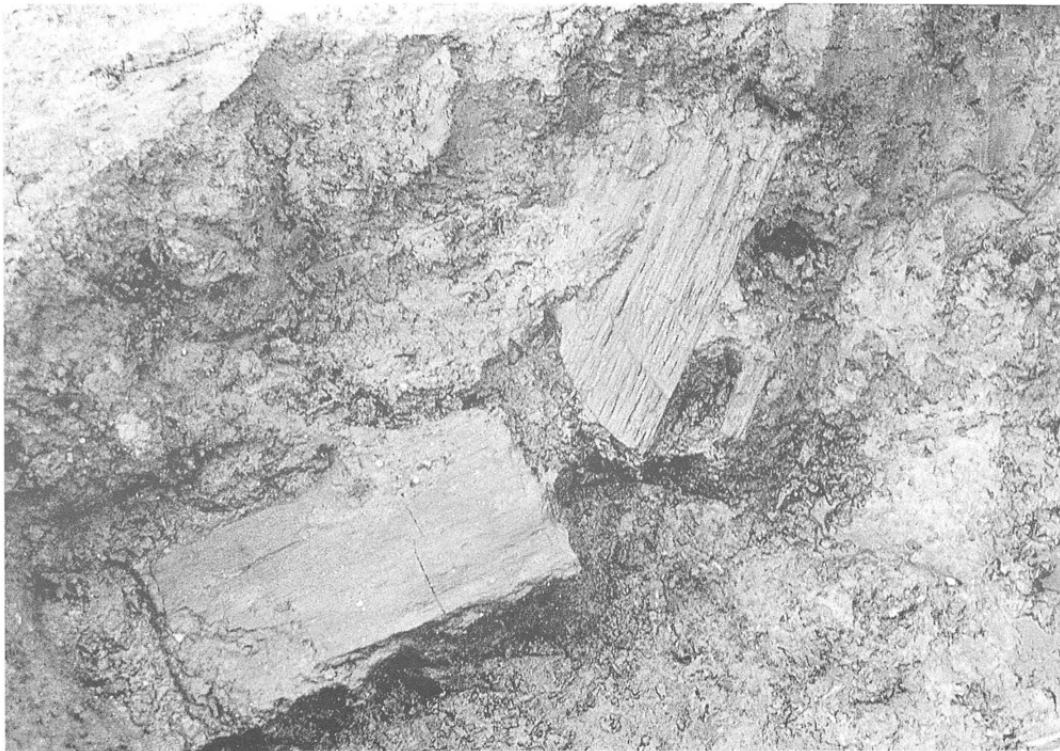
古墳時代1号遺物集中地点 (Loc.1)



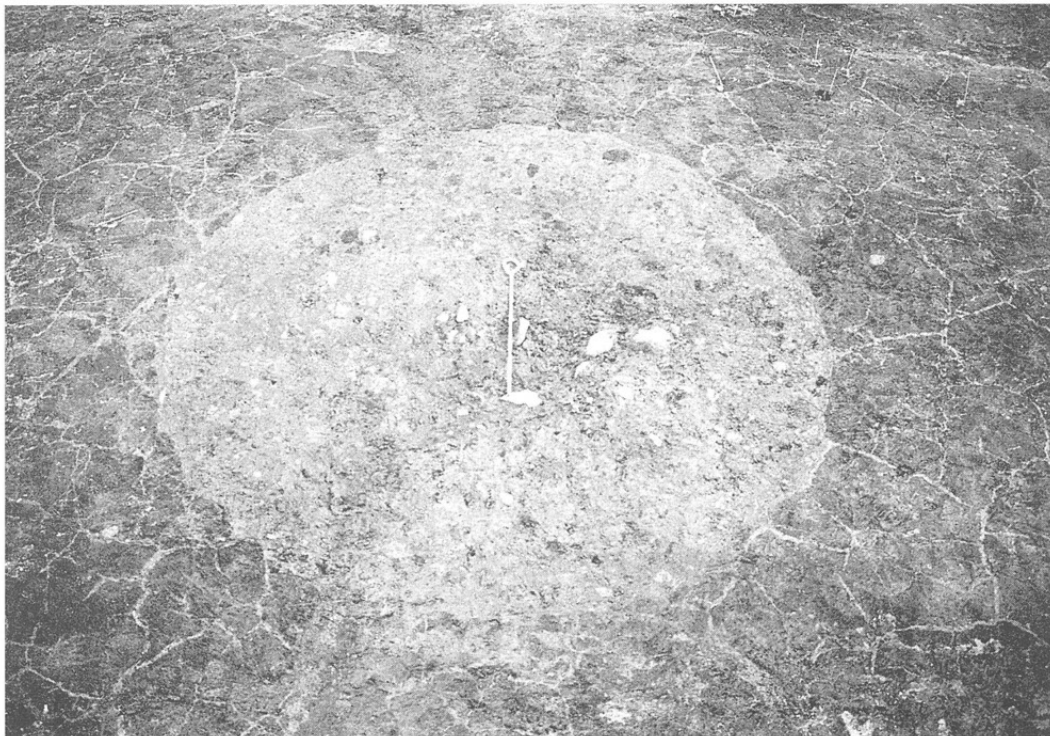
古墳時代 10 号土坑 (SK10)



古墳時代 10 号土坑土器出土状態



中・近世9号土坑 (SK9) 木製品出土状態



中・近世3号土坑 (SK3) 確認状況



弥生式土器 甕



古墳時代の土器 (1)



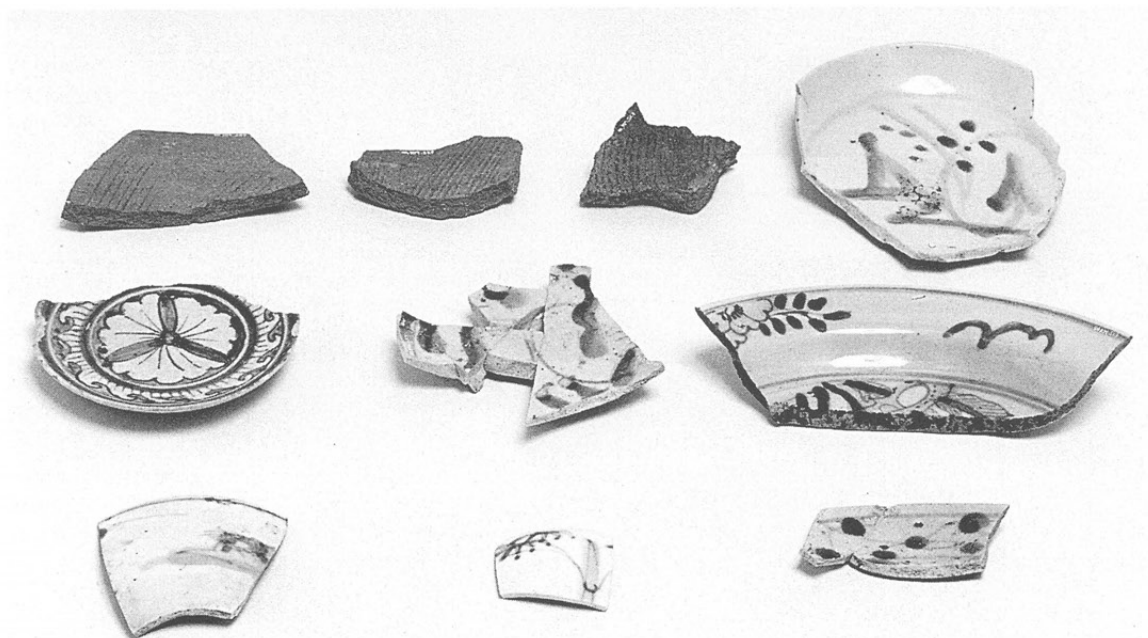
古墳時代の土器 (2)



古墳時代の土器 (3)



中・近世の陶磁器 (1)



中・近世の陶磁器 (2)



中・近世の木製品 (1)



中・近世の木製品 (2)



内耳土器

報告書抄録

ふりがな	きたまちいせき に							
書名	北町遺跡 II							
副書名	第63集							
巻次	II							
シリーズ名	飯山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第63集							
編著者名	高橋 桂, 望月静雄							
編集機関	飯山市教育委員会							
所在地	〒389-2292 長野県飯山市飯山1110-1 電話0269(62)3111 内線363							
発行年月日	平成13年3月21日							
ふりがな 所有遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °、′、″	東経 °、′、″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きたまちいせき 北町遺跡	ながのけんいいやまし 長野県飯山市 おおあざいいやま 大字飯山2610	20213	119	36度 51分 25秒	138度 22分 14秒	20001017 ~ 20001130	500 m ²	長野県立 飯山北高 等学校小 体育館建 設に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
北町遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居址 1	甕形土器				
		古墳時代	竪穴住居址 1	甕 坏 甗 石包丁				
			土坑 3	土師器坏				
			遺物集中地点 6	土師器坏 小型丸底土器 甕 手捏土器 高坏 須恵器 土師器甕				
	中・近世	土坑 8	土器 陶磁器 木製品 (下駄・杓子・曲物)					

飯山市埋蔵文化財調査報告 第63集

北 町 遺 跡 II

発行者 飯山市大字飯山1110-1
飯山市教育委員会
TEL 0269-62-3111

発行日 平成13年3月21日

編集者 飯山市教育委員会
